

神並・西ノ辻・鬼虎川・水走遺跡  
調査報告書

国道308号関連調査の成果

2002

財団法人 東大阪市文化財協会

東大阪市教育委員会

## はじめに

このたび刊行の運びとなりました。『水走遺跡・鬼虎川遺跡・西ノ辻遺跡・神並遺跡の調査報告書は、奈良県北部の急速に進む開発とベッドタウン化に対処するため、大阪の都心部と奈良間を結ぶ交通路線の新たな輸送力の整備拡充を目的として、東大阪市の中央を東西に横断し、大阪の中心部から伸びる国道308号内に、大阪市営地下鉄の中央線と相互乗り入れを行なう鉄道新線（都市高速鉄道東大阪線＝現近鉄東大阪線）と、高速道（阪神高速道路東大阪線）の一体的な延伸事業、さらには、これに伴う国道308号の延伸整備事業に伴って、昭和55年から昭和62年までの足掛け9年に亘る4遺跡の発掘調査成果をまとめたものです。

交通路の早期の整備と完成は、本市にとって重要な行政課題でありましたが、従来より知られていました鬼虎川遺跡と西ノ辻遺跡に加え、試掘調査の結果、新たに判明した水走遺跡と神並遺跡を加えた、4遺跡にまたがる膨大な面積の発掘調査事業の早期実施が急務となり、今後周辺地域で連鎖発生する民間開発等の調査にも十分対応できる調査体制の早期整備拡充が、文化財行政の大きな課題となりました。

幸いにして、大阪府教育委員会文化財保護課などから懇切なご指導を賜わり、昭和57年に財団法人東大阪市文化財協会の設立認可をいただくと共に、広大な面積に亘る調査規模となりましたことから、工期に照らした調査地区の分担をいただいたこともあり、調査期間の大幅な遅延とならずに、すべての現地調査が完了することができました。

4遺跡の発掘調査の中間成果については、昭和59年12月に東大阪市立東公民館において『甕の河内の歴史』をテーマとした中間報告展示会を開催し、市民ならびに研究者の方々を対象に、調査の成果と出土遺物の一部をご紹介しますことができました。

それぞれの遺跡の調査結果については、これまでに刊行いたしました調査概要報告書をご参照いただきたいと思います。四遺跡に亘る全体報告の刊行が予定より相当遅延いたしましたもの、今回ようやく刊行の責任を果たすことができました。

多方面から熱い注目と関心を寄せていただき、ご協力を賜りました関係各位、ならびに調査の実施に際して絶大なご協力をいただきました事業者の関係各位には心からのお礼を申し上げます。ご挨拶のことばといたします。

平成14年2月

財団法人東大阪市文化財協会  
理事長 口吉 亘

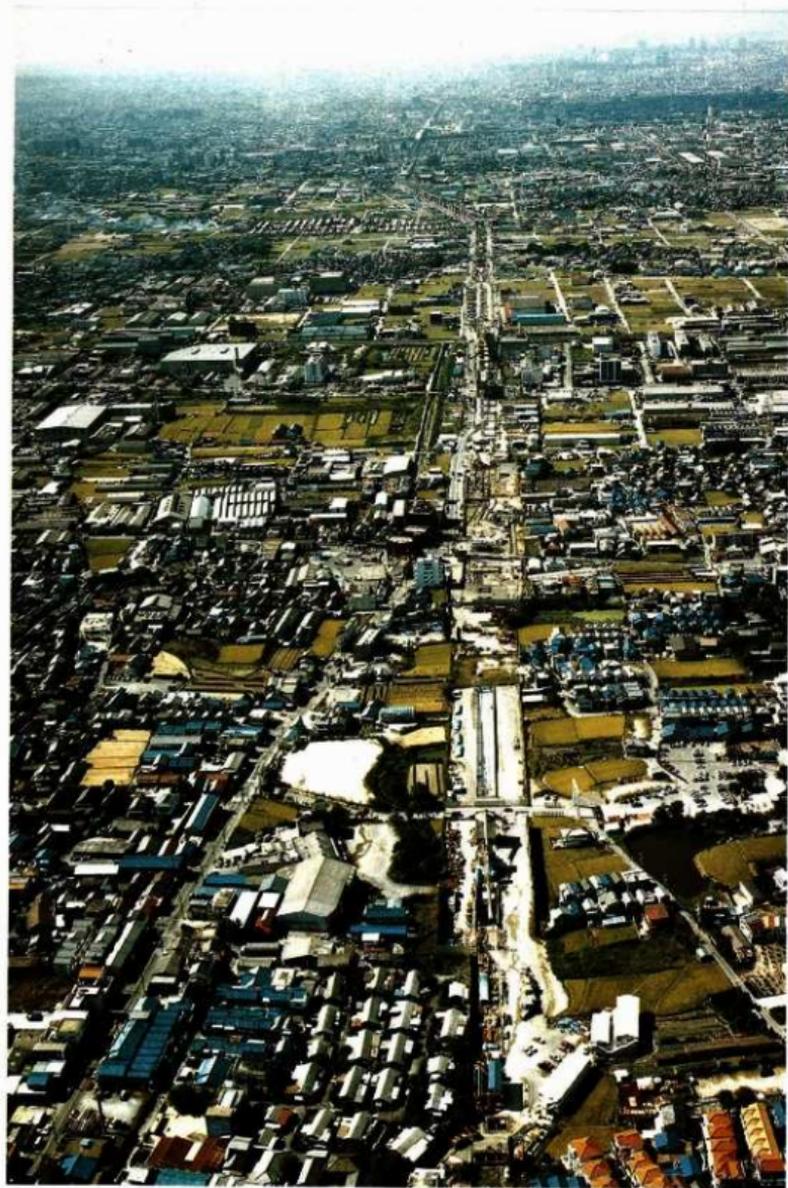
## 例 言

1. 本書は、昭和54年より昭和62年までの9年間に亘り、東大阪市の中央部を東西に横断する国道308号内で、東大阪生駒電鉄株式会社による東大阪都市高速鉄道（現近鉄東大阪線）と阪神高速道路東大阪線の建設、さらに鉄道路線に沿って延伸されることになった大阪府の計画する国道308号及び都市計画道路築港枚岡線の建設に伴って実施した、水走遺跡・鬼虎川遺跡・西ノ辻遺跡・神並遺跡の4遺跡に亘る発掘調査の概要と成果をまとめたものである。
2. 調査は、大阪府教育委員会と東大阪市教育委員会の指導と協力を受けて、「東大阪市遺跡保護調査会」によって路線内の試掘調査より開始したが、本格的な広範囲の調査に対応する新たな調査体制の整備が急務となり、両教育委員会の協議にもとづき、昭和56年に設立された「国道308号線関係遺跡調査会」が調査を引継ぐことになった。  
その後、新たに発見された水走遺跡・神並遺跡の調査が加わると共に、建設諸事業の早期完成に向けた調査の推進、あるいは周辺地域や市内各地で今後連動して発生が予想される民間開発などの増加に対し、東大阪市として即応できる一元的な調査体制の整備の必要から、昭和57年度以降は、大阪府の指導と認可を受けて、「財団法人東大阪市文化財協会」が設立され、以後の調査と整理を推進した。
3. 調査の進行に伴い、工期等の関係からそれぞれの遺跡において大阪府教育委員会文化財保護課による調査地区の分担をお願いし、全面的なご協力を頂くことにより、調査の完了を見ることができた。
4. 各遺跡の出土遺物の整理作業等は、昭和61年～平成2年度までの間に、各事業者のご協力を賜り実施したが、各遺跡の調査概要については、それぞれの刊行済の調査概要報告書を参照願いたい。
5. 本書の執筆については、それぞれの各章末尾に担当を明記した。
6. 長期間にわたる調査・整理事業の実施には、多数の関係機関・関係者からのご協力なくては成し得なかった。ご協力を賜った関係各位のご芳名は、それぞれの調査概要報告書に明記させていただいたが、発掘調査から整理までの間に絶大なご配慮と協力をいただいた建設関係の各事業者・機関に対し、改めて明記してお礼申し上げる次第である。

大阪府（道路課・路政課）・大阪府八尾土木事務所・大阪府教育委員会（文化財保護課）・東大阪生駒電鉄株式会社（現近畿日本鉄道株式会社）・阪神高速道路公団（東大阪工事事務所）

# 目 次

第1章 国道308号関連の調査経過と成果	1
第2章 各遺跡の調査成果	
縄文時代	
1 神並遺跡の押型文土器と遺構	(菅原章太) 7
2 縄文海進と河内湾	(勝田邦夫) 15
弥生時代	
3 鬼虎川遺跡の初期貝塚	(原田 修) 18
4 西ノ辻遺跡の方形周溝墓と出土遺物	(下村晴文・曾我恭子) 24
5 鬼虎川遺跡の墓制	(勝田邦夫) 36
6 鬼虎川遺跡の遺構と遺物	(才原金弘) 47
7 神並・西ノ辻遺跡の谷	(半木隆裕) 51
古墳時代	
8 神並・西ノ辻・鬼虎川遺跡の建物跡と遺物	(中西克宏) 55
9 神並・西ノ辻遺跡の古墳時代水利遺構	(松田順一郎) 61
歴史時代	
10 神並・西ノ辻遺跡の遺溝と遺物	(福永信雄・森島康男) 73
11 水走遺跡の遺構と遺物	(若松博志・上野利明) 95



▲調査地全景(東より)

## 第1章 国道308号関連の調査経過と成果

## 国道308号関連の調査一覧



水走遺跡

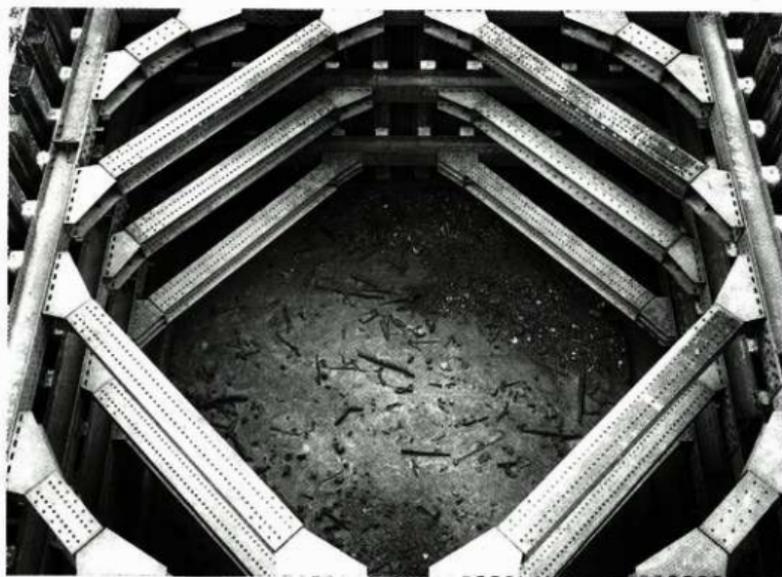
### 水走遺跡

#### ○水走遺跡調査一覧

次数	事業名	実施期間	調査主体	面積
第1次調査	鉄道建設に伴う長田 思智川間の試掘調査	昭和54・12・17～55・4・30	東大阪市遺跡保護調査会	450㎡
第2次調査	鉄道建設・高速道路 建設に伴う調査	昭和57・6・14～58・4・28	(財)東大阪市文化財協会	2,458㎡
第3次調査	◇	昭和58・1・20～58・12・15	◇	2,216㎡
第4次調査	◇	昭和59・1・30～59・12・28	◇	2,859㎡
第5次調査	◇	昭和59・1・6～59・8・20	大阪府教育委員会	1,266㎡
第6次調査	◇	昭和59・2・15～59・3・31	大谷女子大学	485㎡
第7次調査	◇	昭和59・4・24～	大阪府教育委員会	2,021㎡
第8次調査	阪神高速道路水走ラ ンプ建設に伴う調査	昭和59・5・9～60・3・31	(財)東大阪市文化財協会	1,291㎡
第9次調査	◇	昭和60・5・15～61・3・31	◇	1,236㎡



水走遺跡



▲水走遺跡調査風景



鬼虎川遺跡

○鬼虎川遺跡調査一覧

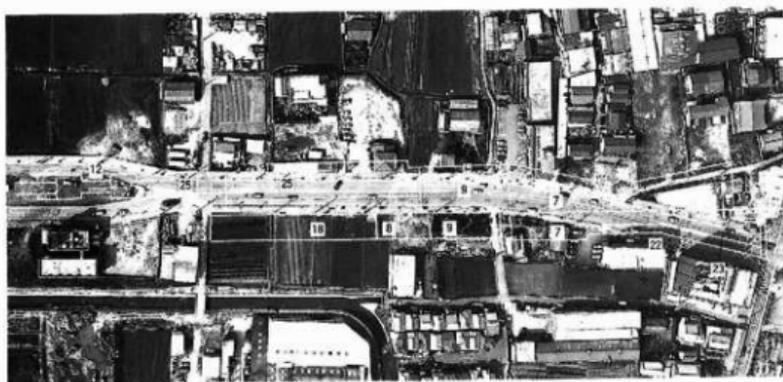
次数	事業名	実施期間	調査主体	面積
第12次調査	鉄道建設に伴う調査	昭和55・7・21～55・12・20	東大阪市遺跡保護調査会	1,124㎡
第13次調査	◇	昭和56・1・10～56・6・30	国道308号内関係遺跡調査会	767㎡
第15次調査	◇	昭和56・7・1～56・10・31	◇	770㎡
第17次調査	道路建設に伴う立会 調査	昭和56・10・16～56・11・6	東大阪市教育委員会	20㎡
第18次調査	鉄道建設に伴う調査	昭和57・12・1～58・3・31	(財)東大阪市文化財協会	1,500㎡
第19次調査	◇	昭和58・5・9～58・11・18	◇	537㎡
第20次調査	◇	昭和57・6・14～58・4・28	◇	941㎡
第21次調査	◇	昭和58・5・9～58・12・15	◇	335㎡
第22次調査	鉄道東大阪線建設道 路に伴う調査	昭和58・5・9～58・12・15	大阪府教育委員会	309㎡
第23次調査	◇	昭和58・5・31～58・7・27	◇	547㎡
第24次調査	◇	昭和58・6・26～58・8・26	◇	1,535㎡
第25次調査	◇	昭和59・5・25～59・11・21	(財)東大阪市文化財協会	1,943㎡
第26次調査	◇	昭和59・5・25～60・10・30	大阪府教育委員会	697㎡
第27次調査	阪神高速道路水走ラ ンプ建設に伴う調査	昭和59・5・9～60・3・31	(財)東大阪市文化財協会	1,291㎡
第28次調査	◇	昭和60・5・15～61・3・31	◇	1,236㎡



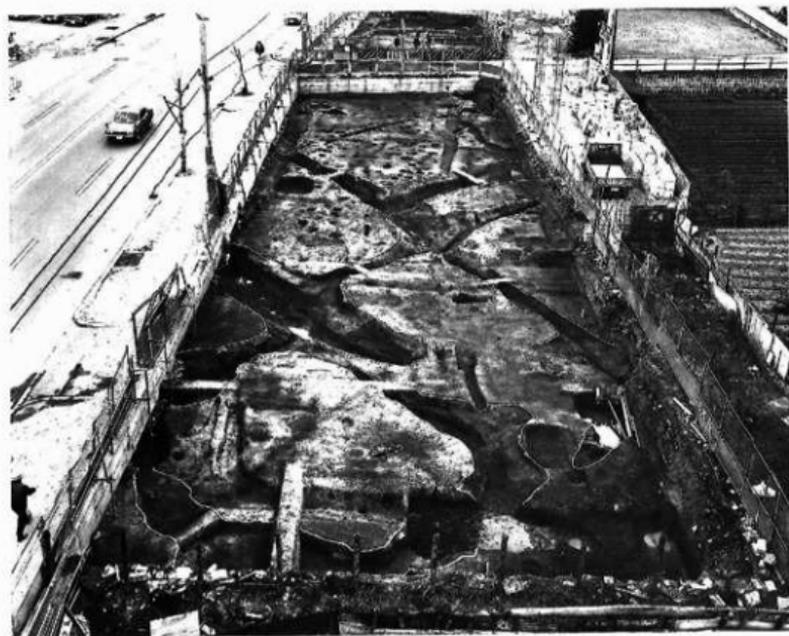
鬼虎川遺跡

○西ノ辻遺跡調査一覧

次数	事業名	実施期間	調査主体	面積
第6次調査	鉄道東大阪線建設・ 道路建設に伴う調査	昭和57・8・17~57・9・3	(財)東大阪市文化財協会	200㎡
第7次調査	◇	昭和57・10・24~58・3・31	◇	2,536㎡
第8次調査	◇	昭和57・11・1~58・11・28	◇	189㎡
第9次調査	◇	昭和58・12・22~59・5・23	◇	800㎡
第10次調査	◇	昭和58・12・1~59・9・17	◇	2,460㎡
第11次調査	◇	昭和58・4・11~58・8・25	大阪府教育委員会	1,994㎡
第12次調査	◇	昭和59・1・20~59・5・10	◇	614㎡
第13次調査	◇	昭和59・2・28~59・6・25	◇	1,082㎡
第14次調査	◇	昭和59・3・25~59・6・22	◇	575㎡
第15次調査	◇	昭和59・3・1~59・7・4	◇	312㎡
第16次調査	◇	昭和59・5・24~60・4・3	(財)東大阪市文化財協会	2,927㎡
第17次調査	◇	昭和59・7・9~60・5・1	◇	1,731㎡
第18次調査	◇	昭和60・2・6~60・3・31	大阪府教育委員会	545㎡
第19次調査	◇	昭和59・12・20~60・2・20	◇	625㎡
第20次調査	◇	昭和60・5・29~60・9・10	◇	688㎡
第21次調査	◇	昭和60・12・3~61・2・12	(財)東大阪市文化財協会	975㎡
第22次調査	◇	昭和61・1・16~61・9・5	◇	485㎡
第23次調査	◇	昭和62・1・19~62・5・20	◇	642㎡



西ノ辻遺跡



▲西ノ辻遺跡方形周溝基群(西より)



神並遺跡

○神並遺跡調査一覧

次数	事業名	実施期間	調査主体	面積
第1次調査	鉄道東大阪線・道路建設に伴う(西石切町)試掘調査	昭和57・3・1～56・3・30	国道308号線内遺跡調査会	1,500㎡
	鉄道東大阪船設・道路建設に伴う調査	昭和56・11・25～57・3・31	国道308号線内遺跡調査会	4,178㎡
	鉄道建設に伴う生駒トンネル坑口調査	昭和57・6・1～57・6・14	(財)東大阪市文化財協会	60㎡
第2次調査	鉄道東大阪線建設・道路建設に伴う調査	昭和57・7・26～57・12・1	◇	2,174㎡
第3次調査	◇	昭和58・1・24～58・4・9	◇	1,440㎡
第4次調査	◇	昭和58・9・26～59・3・12	◇	1,673㎡
第5-1次調査	◇	昭和58・3・22～59・3・7	大阪府教育委員会	3,107㎡
第5-2次調査	◇	昭和58・3・22～59・3・7	◇	680㎡
第6次調査	◇	昭和60・4・15～60・5・25	◇	1,923㎡

## 第2章 各遺跡の調査成果

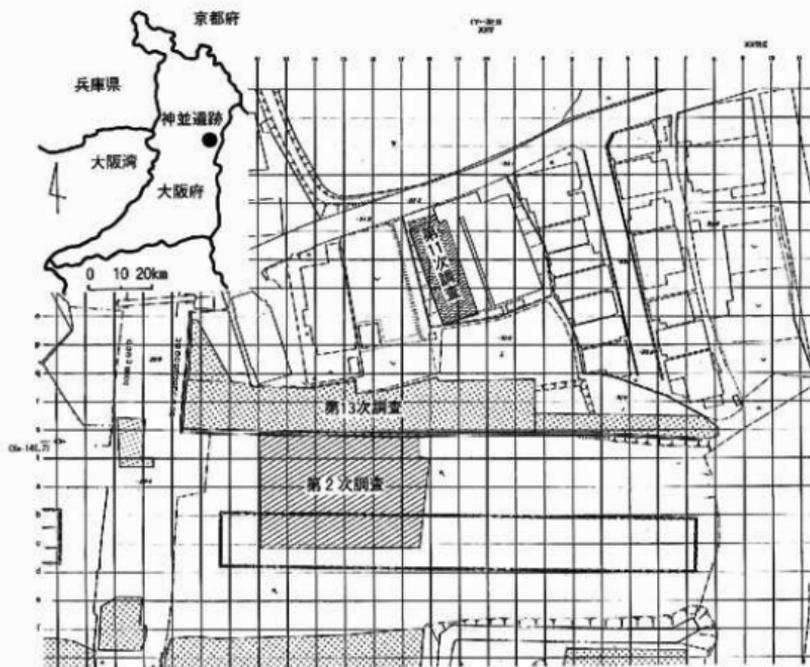
# 1. 神並遺跡の押型文土器と遺構

## I. はじめに

神並遺跡は、東大阪市東石切町1丁目を中心に広がる縄文時代～室町時代の複合遺跡である。

本遺跡は生駒山の西麓に発達する中位段丘上に立地し、標高で約30m前後を測る。遺跡の南方には生駒山地を急流する谷川（鬼虎川）があり、縄文時代早期の遺物包含層は北から南にかけての傾斜面に認められる。一方、遺跡の北方には埋没谷が確認されており、早期の生活面は、この2本の自然河川に挟まれた小地域であったことが明らかになっている。また神並遺跡の周辺には旧石器時代～室町時代の遺跡が密集しており、埋蔵文化財の宝庫となっている。

本遺跡は、昭和56年度に行なわれた試掘調査で発見された。現在まで28次の発掘調査が実施されており、そのうち早期の押型文土器とそれに伴う遺構が確認されたのは、2次、11次、13次の3回を数えている。ここでは、その3回の調査の成果の概略を述べ、それに敷衍する若干の問題について考えてみることにしたい。



▲神並遺跡押型文土器出土地点位置図(方眼1目盛は5mを表わす)



▲2次 礫層面の状況



▲11次 集石土坑



▲11次 焼土坑1



▲13次 早期の遺物包含層

## II. 調査の概要

### (1) 第2次調査 (1982.8.9~12.1)

鎌倉～室町時代の遺構面の下位には、無遺物の砂礫層があり、その下面から厚さ10～60cmの縄文時代早期遺物包含層が検出された。包含層中には、多量（コンテナー約30箱分）の押型文土器が含まれていた。石器では、有舌尖頭器2点が伴出したのをはじめ、顕著な出土を見た。そのほかでは、土偶が2点発見された。押型文土器に伴う土偶の例としては、全国で初例であった。包含層の下面には礫層があり、凹んだところに集中してみられるところから、礫上面に何らかの居住施設があったのではないかと推定された。

### (2) 第11次調査 (1987.10.1~11.16)

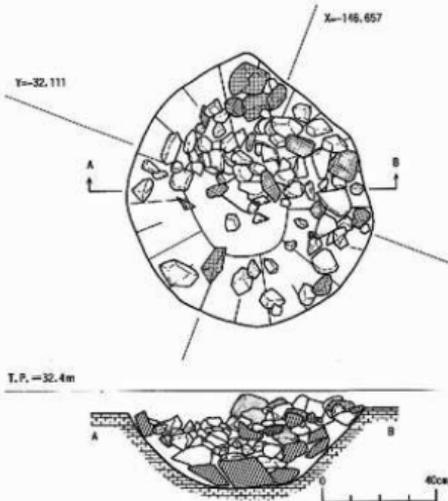
縄文時代早期の集石土坑1基と焼土坑3基、土坑7基を検出。集石土坑から約2m離れた地点に焼土坑があり、土坑側面の焼痕の存否から、調理の場と石を焼く場との違いが認められた。遺構面を覆う包含層から押型文土器や石器が出土したが、中世期以降にかなり削平されていた。また11次の遺構面と2次調査地との比高は約3mあることから、11次調査地周辺が居住域であり、谷への傾斜面に多量の土器が埋没していたことが判明した。小土偶が1点出土。

### (3) 第13次調査 (1988.9.1~89.3.25)

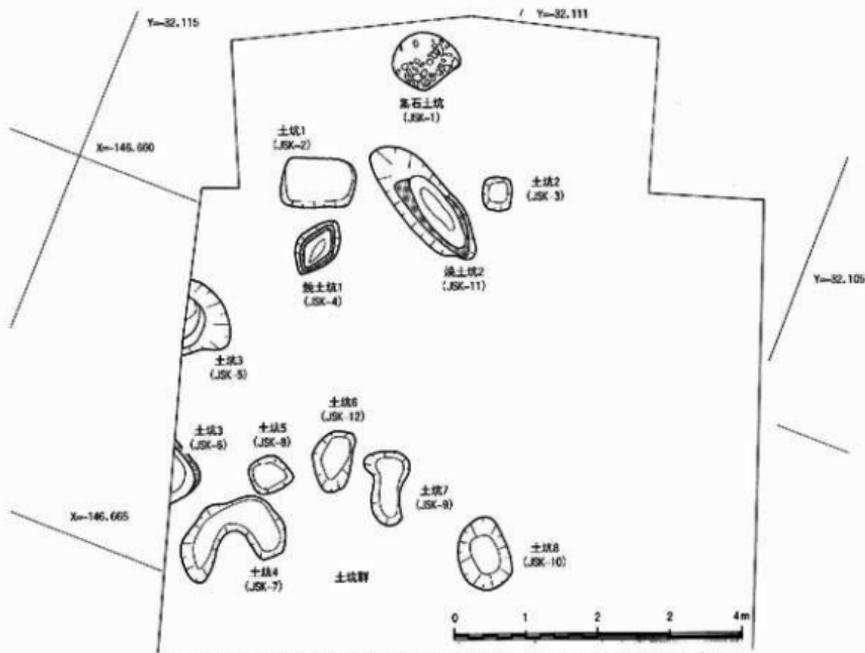
2次と11次の中間にあたる。包含層は部分的に存在するのみであった。押型文土器および有舌尖頭器が2点出土。包含層は谷状をなしていた。

### 11次検出の集石土坑

長径96cm、短径85cm、深さ33cmの楕円形を呈する土坑の中に200個以上の石が集積していた。土坑断面は緩やかなすり鉢状をなす。石は生駒山地で産する自然石である。集積の状態としては、上面はややまばらで土坑の底面に近づくにつれて密に集積していた。また土坑底面には、人頭大の石が平坦面をなすように据えられていたが、上～中位面には、集積の規則性は認められなかった。石は、かなりの焼痕があり、黒ずんだり、脆くなって割れているのが多かった(図のアミ目の線)。



▲集石土坑実測図



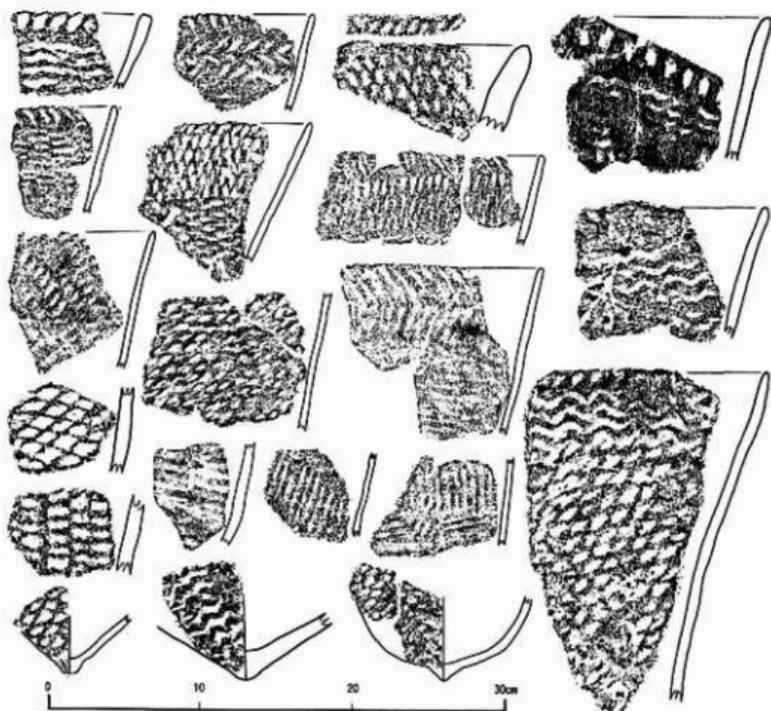
▲第11次調査検出縄文時代早期遺構平面図(アミ目は焼土層を表す)



### Ⅲ. 出土遺物

#### (1) 押型文土器

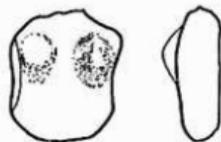
2次調査で多量の押型文土器が出土している。文様は、神宮寺式の範疇に収まるネガティブな栴円文を主体としており、ポジティブな栴円文は認められない。これは11次、13次調査も同様である。また、包含層（12層）の直上層である11層で、密接施文する山形文の土器群が出土しており、これは神宮寺式に後続する型式と考えられている。



▲ 押型文土器実測図(下村晴文・菅原章太・橋本正幸ほか『神並遺跡Ⅱ』1987より転載)

(2) 土偶

2次調査で2点、11次調査で1点の土偶が出土した。2次調査例はほぼ方形に近く、乳房と胴部のくびれのみを表現している。11次例は、2次例と比べると小型で、上下端は弧状を帯び、バイオリン型に近い形態である。



▲11次 土偶 ※実寸大



▲2次 土偶1



▲2次 土偶2

(3) 石器

有舌尖頭器5点をはじめ、膨大な量の石器が出土した。器種には、尖頭器、石鏃、石錐、削器、掻器、石匙、楔形石器、敲石、磨石、凹石、砥石がある。他に、線刻のある碟や局部磨製の石製品が出土している。これらはすべて押型文土器に伴うものである。石材は、二上山地域に分布するサヌカイトである。



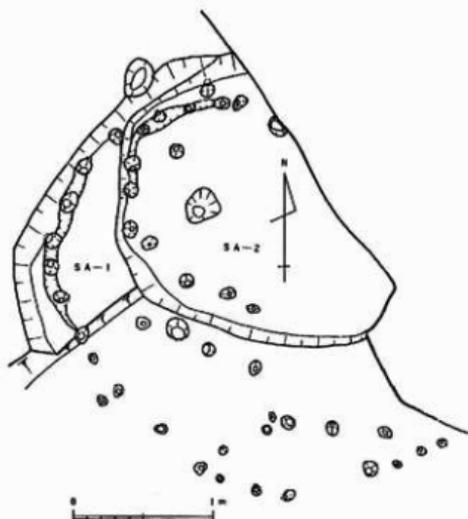
▲2次 有舌尖頭器



▲13次 有舌尖頭器出土状況



▲2次ほか 石鏃・石錐・スクレイパー



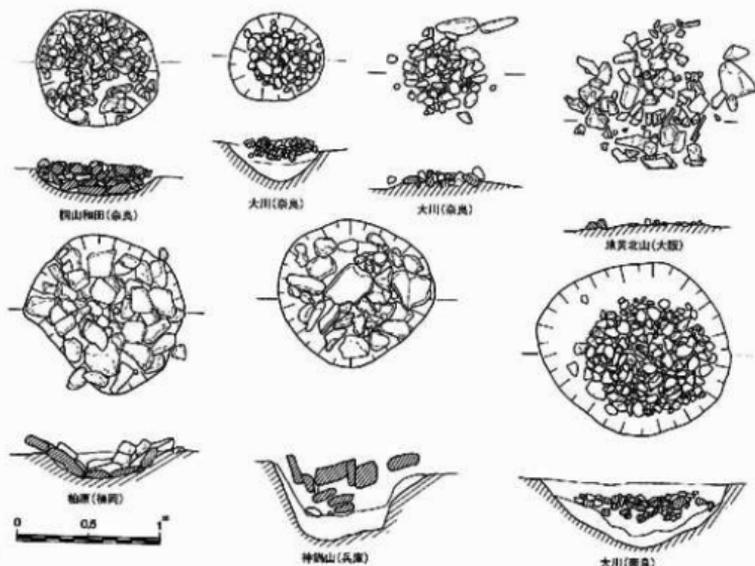
▲西岡本遺跡の竪穴住居跡(六甲山麓遺跡調査会  
「西岡本遺跡発掘調査中間概要2」(史料館だより)14号,1989より))

#### IV. まとめ

遺構と遺物について若干の問題点を記してまとめたい。

集石土坑については、検出された石の状態から、これを調理の場としての集石炉と見做して差し支えないものと思われる。そこで、近畿地方を中心として現在まで確認されている集石炉を例示的に掲げた(下図参照)。今これらを形態上から分類すると、

- I 土坑を伴わないもの
- II 土坑を伴い、
  - a 石の配置に規則性のあるもの



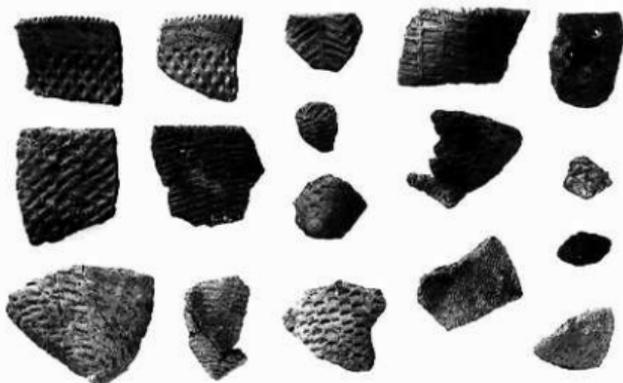
▲西日本の集石炉(押型文土器文化期)集成図(各報告書より引用、加筆)

b 規則性のないもの、に大別できる。I類は平面的に石が集結するものである。尖底の押型文土器を使った炉跡の可能性が指摘できる。II a類は石の配置に規則性を持たせることで土坑の壁面や底面を整えるもので、土坑の上面から底面まで石が充填されることが多い。II b類では土坑の上面や中面のみ石が集積するものがみられる。

これらの形態分類の他、土坑内での火熱を受けた部位による分類がある。近畿地方では、このほか早期末の条痕文土器に伴う集石炉が大津市石山貝塚から発見されている。集石炉については、住居との関係が問題となっている。この時期の住居は小屋掛け程度の平地住居の段階から、地面を掘り凹める堅穴住居に移行しつつあり、炉は屋外に設けられている。例えば奈良県桐山和田遺跡では、約20基の集石炉が群集した状態で検出されたが、住居は未発見であった。

近畿地方の堅穴住居は、大鼻・坂倉・西出（三重県）、大川（奈良県）、別宮家野・西岡本（兵庫県）の各遺跡で見つかっている。また神並遺跡の焼土坑は先述したように、石そのものを焼いた施設と考えられ、このような集石炉と焼土坑の位置関係については、静岡県若宮遺跡・寺林南遺跡に例がある。焼土坑の形状は、木米ドーム形を呈していた例が散見される。三重県坂倉遺跡で見つかった焼土坑はその好例である。

遺物について触れておく。神並遺跡で出土した押型文土器は、2次調査11層出土の極く少量の葛籠尾崎I式を除いては、すべて神宮寺式のみであって、その意味では、神宮寺の単純、標式遺跡といえるのである。一方、神宮寺式土器の標識遺跡である交野市神宮寺遺跡では、従来知られていたネガティブ楕円文のほか、黄島式や高山寺式の土器、表裏に条痕を施した土器などが見つかっている。また、神宮寺式に先行する大川式土器は近年三重県で出土例が相次いでいる。亀山市大鼻遺跡は、台地南縁に立地し、堅穴住居7棟、焼土坑16基が検出された。出土



▲西出遺跡の押型文土器(三重県埋蔵文化財センター提供)



▲神宮寺遺跡の押型文土器(交野市教育委員会提供)

土器は200片以上を数え、大川式の古相を示す土器群(大鼻式)がある。河岸段丘上に立地する安芸郡美里村西出遺跡は壑穴住居20棟以上、焼土坑3基が発見され、3000片以上の土器が出土した。土器の時期は大川式の新しい段階、神宮寺式併行、高山寺式と多岐に亘っている。

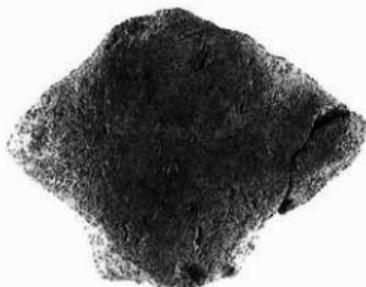
土器の量に比べて石器が非常に少量である点が特色である。押型文土器に伴う土偶は、神並遺跡で3個、大鼻遺跡で1個発見されている。関東地方の撫糸文土器に伴う土偶と同じく、手足がなく、乳房と胴のくびれを表象しているなど、共通点が多く窺われる。神並遺跡の石器は旧石器から草創期にかけてのものが多く出土している。遺構、遺物の問題については11次調査地周辺の継続的な調査によって明らかになっていくものと思われる。(1992年稿了)

<主な参考文献>

- ① 小野塚恵子「礫の分布と集石および集石土坑」(『網田遺跡群1978年度調査概報』八王子資料刊行会、1979年)
- ② 谷口康浩「縄文時代「集石遺構」に関する試論」(『東京考古』4、1986年)
- ③ 日本考古学協会秋季大会三重県実行委員会『三重の遺跡』、1979年
- ④ 三重県埋蔵文化財センター『西出遺跡』(現地説明会資料)、1989年
- ⑤ 原田昌幸「縄文時代の初期土偶」(『MUSEUM』434、1987年)
- ⑥ 東大阪市立郷土博物館『縄文文化の一万年』、1991年

<写真の提供を受けた機関とご教示いただいた方々(順不同)>

三重県埋蔵文化財センター、交野市教育委員会。片岡 肇、古永康夫、廻山隆長、奥野和夫、小川楊子、北村博義、奥 義次、小杉康、谷口康弘、松山真一。



▲大鼻遺跡の土偶(三重県埋蔵文化財センター提供)

## 2. 縄文海進と河内湾

### 1 縄文海進と河内湾

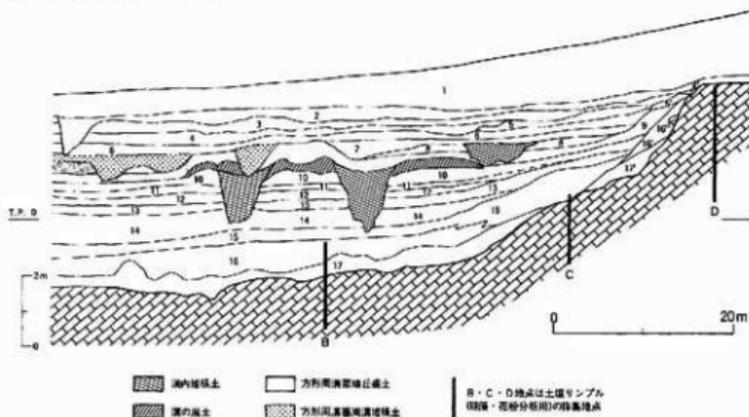
2万年前のウルム氷期の最盛期に、大きく低下していた海面は、その後地球が温暖化していくとともに、陸地にあった水が融けて海に流れ、海面が上昇して陸地の奥深くまで海水が侵入していった。6000年位前には、海面は現在とほとんど同じか、少し高いぐらいまで上昇し、生駒山の麓まで、つまり河内平野もすっかり海水におおわれてしまった。南北に伸びる上町台地が半島のようになって河内の海と大阪湾とを隔てていた。

このかつての内湾は河内湾と呼ばれている。北は高槻市から茨木市、南は八尾市の南端近くまで海水の侵入が見られた。

東大阪市布市町からは体長11m以上もあるマッコウクジラの骨、西石切町の鬼虎川遺跡でもクジラ、イルカ、サメ、フグ、サワラ、スズキ、アカエイ、シャミセンガイなど海棲動物の骨が見つっている。



▲河内湾模式図



▲鬼虎川遺跡第32次調査層序模式図

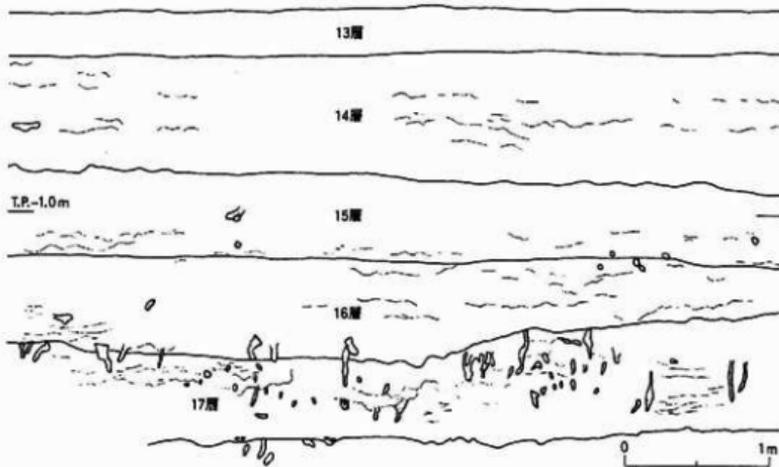


▲海成堆積層

## 2 鬼虎川遺跡の海成堆積層

海成堆積層は大きく4層に分けられる。最上層は暗オリーブ灰色極細粒砂混じりシルトで、厚さ30~100cm、微量のシャミセンガイ、少量のヌマガイ、サメの歯、アカエイの刺が、上層は灰色中粒砂~極細粒砂混じりシルトで、厚さ20~40cm、縄文中期の土器が、中層は灰色礫混じり細粒砂~中粒砂で厚さ40~60cmで、ここからはたくさんのシャミセンガイ、スズキ、クジラなどの骨、縄文前期の土器が、下層は灰色大礫~シルトで厚さ20~100cm、たくさんのシャミセンガイ、サワラの骨などが出土した。

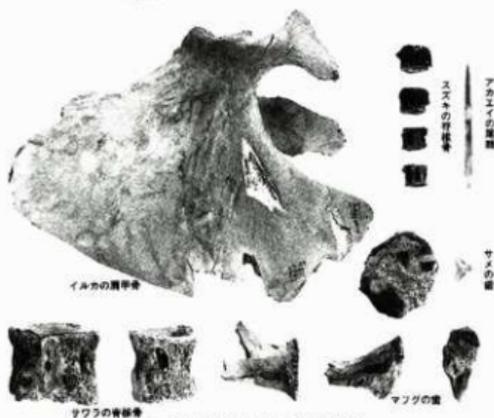
河内湾の海退期に入っていて、激しい沖積作用と相俟って堆積層が下層から礫(大礫~中礫)、礫混じり細粒砂~中粒砂、中粒砂~極細粒砂混じりシルト、極細粒砂混じりシルトと変化している。これは海退による波の営力の弱化、沿岸州の形成による静水域への変化が考えられる。



▲A地区海成堆積層と生痕化石



▲海成層(第17層)出土の縄文土器



▲鬼虎川遺跡出土の海棲動物

### 3 縄文土器

縄文土器は、前期の北白川下層式・大歳山式が多く、次いで中期の船元Ⅰ・Ⅱ式、後期の中津式・元住吉山式、晩期の船橋式が出土している。北白川下層式は、口縁部が波状形で、端部と口縁部のすぐ下の2条の凸帯文上に刻み目文を綾杉状に施している。体部の上段に左撚り縄文、下段に右撚りの羽状縄文を施している。また、内外面を貝殻条痕で調整した土器もある。

その他、石匙、敲打具、削器などの石製品やサヌカイト片が出土している。摩滅もほとんどみられず、動植物遺体と共に出土したことから波打ち際に埋没した状態を示していると考えられる。これらの土器を残した縄文人は、海に隣接した低位段丘上に居住していたものと考えられるが、現段階では未発見である。堆積土中より土器が出土したことから海進の時期、堆積の状態、湾から潟への変化の様子などを知ることができる。

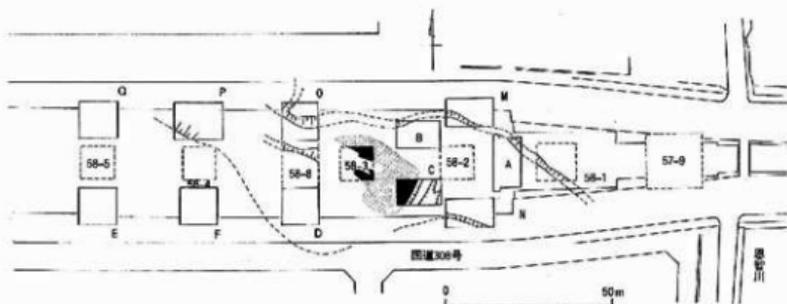
### 3 鬼虎川遺跡の初期貝塚

鬼虎川遺跡は、生駒山の西麓部に位置し、西に広がる河内平野部へ移行する付近にあたり、現在の標高はおよそ3～4mである。旧地表はTP約2～3mで、地表下3～4mほど下に弥生時代遺物包含層及び遺構が良好に遺存している。

遺跡は、現在の国道308号が国道170号と交差する東大阪市弥生町を中心とし、東北部分は一歩西石切町、南は新町へ広がり、東側は弥生時代後半～中世にかけての西ノ辻遺跡、西側は山麓の水を集める思智川をほぼ境に、平安～室町時代を中心とする水走遺跡に接し、東西500m、南北800mの範囲に広がる河内平野でも屈指の弥生時代中期を中心とする低湿地集落で、集落縁辺に貝塚が伴い、また豊富な木製品と銅鐸等の銜型が出土した遺跡としてよく知られている所である。

思智川のすぐ西側、遺跡の西端にあたる国道308号の分離帯内で、昭和58年～59年にかけて鉄道東大阪線及び阪神高速道路水走ランプ口の橋脚建設に伴って実施した鬼虎川遺跡第21次・27次調査により、凹地底から前期後半の遺物包含層の下から、時期の遡る交帯文系土器を伴った弥生時代初期の貝塚が発見され、多数の土器と共に骨角牙製品、木製品、貝製品、石器などの遺物が出土し、両時代の移行期の様子を考える上で貴重な発見となった。

貝塚の発見された凹地は、現地地表下約5.2mの所に存在し、幅は25mから広い部分で40mにも達し、緩やかに底部へ傾斜して深さは1.2mを測る。凹地は東方の鬼虎川遺跡の中心部へと続き、西方は近くの河内潟へ通じていたと見られる。凹地は中期末までに埋没していくが、底近くに堆積した前期後半の土器・木製品などを含む単純な遺物包含層の遺物出土状況から、潟の干満の影響を受けて凹地内に汽水がかなり侵入し、漁撈のエリやモンドリ状の仕掛けが施されていたと見られる。貝塚はこの層の直下、凹地の中央最深部で検出した。



▲貝塚の位置図



▲貝塚の検出状況(第27次調査Cビット)

層別	層土色	特徴	出土遺物	
21次調査	27次調査			
第24層	第27層	黒褐色泥炭粘土	淡水層	弥生前期末～中期初めの土器少量
第25層	第28-1層	黒色植物片混シルト質粘土	弱い汽水	弥生前期中ごろ～後半土器(壺・甕・鉢・蓋) 石器(石鏃・石鏃・石瓶丁) 木製農耕具(鍬・鋤)・その他木製品(木葉文を刻む扇形木製品・把手状木製品・漁具・弓ほか) 骨角製品(鹿製品・歯牙製垂飾・浮袋口) 輪形樹皮製品・剥痕土器片
第26層	第28-2層 (貝塚層)	オリーブ黒色シルト質粘土	弱い汽水	縄文晩期末突帯文系土器(深鉢・精製浅鉢・粗製浅鉢・甕) 弥生前期前半～中頃土器(壺・甕・鉢・蓋) 石器(石鏃・石鏃)・不明石製品 土製品(土鏃・環状土製品) 木製品(柄状木製品・剣形木製品・蛤刃石斧の斧頭・弓) 骨角牙製品(寛形垂飾り・牙製腕飾・黒漆塗短剣形骨製品) 貝製品(マツカサ貝製垂飾・サルボウ貝製垂飾) 自然遺物(セタシジミなど貝類・獣骨・魚骨類・カニ爪) など
第27層	第29層		海水～汽水	地山層、まれに縄文後期の土器を含む

貝塚は、凹地が胃袋状にやや広がった部分のほぼ中央部に投棄形成されていた。その規模は東西約27m、南北約18mで、西半区域は流水による侵蝕で帯状となっていた。貝塚層は、各種の貝を含む黒色のシルト質粘土層で、約15cm～10cmの厚みで西へ広がり、面積は約320㎡を測る。

貝塚を構成する貝の種類は、淡水産7種、汽水産2種、海産15種の合計24種で、第27次調査の知見では、貝総重量約148kg中の個体別割合は、95%が淡水産のセタシジミ貝(75.2%)とクロダカワニナ(20.14%)が占め、この他にササノハガイ・ヒメタニシ・ドブガイ・カラスガイ・セタイシガイが少量混じり、河内海縁辺の低湿地の状況をよく示していた。

汽水産は、マガキ・フトヘナタリの2種、海産はタイラギ・ハマグリ・バカガイ・サザエ・アカニシ・ズガイ・ウミニナ・マクラガイ・ツメタガイ・ツノガイ・ムシロガイ・ウミナシトマヤ・イシダタミ・ツメガイ・オオヘビガイをそれぞれ微量に含んでいた。

貝塚層内には、動物骨としてシカ・イノシシ・イヌ・水鳥・カメ・フナ・コイ・ボラ・マダイ・サワラ・サメ・フグなどの骨の他、クロベンケイガニの跗脚多数が出土している。



◀貝塚層の堆積状況  
(第27次調査Cビット)

遺物出土状況▶



東方山麓に所在する日下貝塚で検出された縄文晩期の小貝塚の例では、セタシジミが97%に達し、クロダカワニナは僅少であるのに対し、鬼虎川遺跡の初期貝塚は微量なクロダカワニナの割合が非常に多いのが特徴である。

貝塚層より伴出した遺物は、突帯文系土器・弥生土器・石器・木製品・骨角牙製品・貝製品・土製品があるが、弥生土器以外は全体に縄文色の濃い遺物である。

第21次調査では、縄文時代晩期末に比定される長原式系の深鉢・浅鉢・壺などの突帯文系土器多数と共に、弥生時代前期中葉の壺・甕などの弥生土器が少量共伴する事実が確認されたが、続く27次調査地点では良好に遺存した貝塚層内から、同じく突帯文系土器と共に弥生前期中葉の壺・甕・鉢・蓋などの器種がそろって多数出土した。

推定面積約320㎡に及ぶ貝塚全体の広さから考えると、当然投棄ブロックに時期差があり、地点により出土遺物の内容が異なることが考えられるが、27次調査では復原した土器個体数で概算すると、半数近くが弥生土器が占めている。貝塚内の弥生土器群は、上部を覆う前後半期の層の上器群とは全く異なる古いタイプである。

弥生土器の壺には、黒色塗布物と赤彩文を施し、細い沈線で木葉状文やV字斜線文などを刻むものがあり、鉢や甕には九州の板付Ⅱ式土器や岡山県津島南遺跡などの弥生土器に類似するものがあり、胎土の観察・分析から見ても他地域から搬入されたと思われる土器群が多い。

また、突帯文系土器は、深鉢がいわゆる長原式とは異なった口頸部の傾きの外反度や、刻目突帯がより下がった位置に付くものが多く、甕でも刻目突帯を持つ古いタイプと、刻目を施さず口頸部を外反させた新しいタイプが存在する。

さらに、弥生土器の甕とは手法が大きく異なり、口縁部や頸部に断面三角形の無刻目の突帯を付けた小型の甕の一群や、砂粒を多く混ぜ、突帯を貼付けたような直口する口縁端面角に粗い刻目を施す粗製の甕などは、板付式系土器の影響のもとで成立し、長原式に後続する土器形式として考えると、貝塚出土の土器群は、大きく二段階に分離編年することができる。

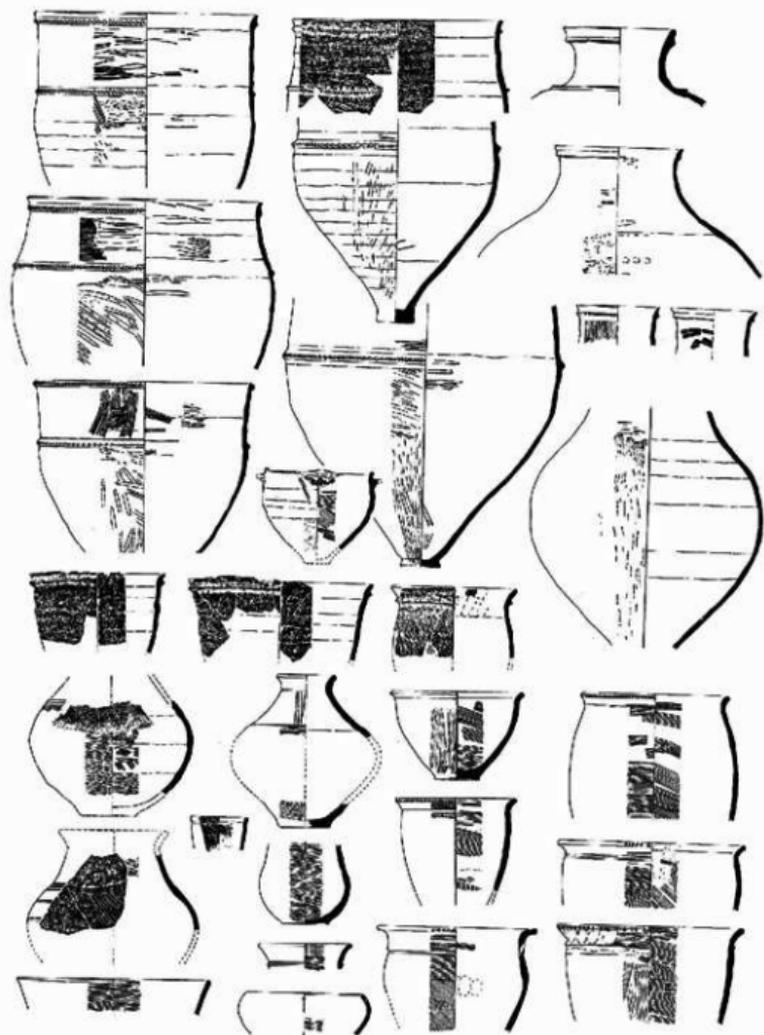
貝塚より出土した木製品には、側面縦位に刻目を施した大型蛤刃石斧装着用の木製斧頭があるほか、長い柄をもつスコップ状木製品(鋤?)・穴掘棒?・短弓・刺突棒・短剣形木製品があり、農具的な道具が含まれているのが注目される。

石器には、小型無茎式石鏃や石皿片のほか、網錘りである石錘が多く、弥生文化特有の石器は皆無である。石製品としては、唯一蛇紋岩製の玉がある。土製品には、耳飾りと考えられる環状土製品のほか土鍾が含まれており、漁撈関係の遺物が目立つ。

また、骨角牙製品としては黒漆塗りの短剣形骨製品や、先端を尖らせ二孔を有する鹿骨製装飾品が数点あるほか、ハイガイやサルボウガイに小孔をあけたもの、小孔2をあけたマツカサガイ製の貝製装飾品が多く含まれているのも大きな特徴である。

鬼虎川集落の西端、凹地底内に残された弥生初期の貝塚の様相は、文化の過渡期に在地集団が新たに稲作文化受容の中で形成した廃棄場として理解するのか、あるいは新たな稲作集団と在地集団の接触交流の中で共用の廃棄場として形成されたものであるか、判断に苦しむところ

であるが、少なくとも貝塚全体におよぶ遺物の中の土器の構成から見れば、在地集団が新しい稲作文化を受容していく過程をそこに読み取れるのではないだろうか。(原田)



▲貝塚より出土した突帯文土器・弥生土器(1/8)



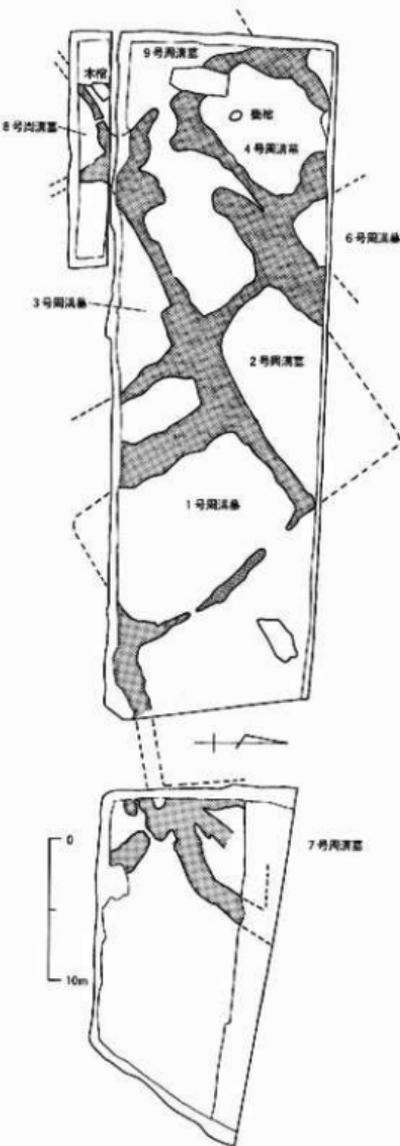
▲貝塚出土の突帯文土器と弥生土器

#### 4. 西ノ辻遺跡の方形周溝墓と出土遺物

西ノ辻遺跡の方形周溝墓は、これまで7次調査で7基、26次調査で2基、合計9基確認されている。周溝墓群の北側には、当時大きな谷が横たわっており、谷を挟んで北に2基の方形周溝墓が発見されているが、これは別の集落（植附遺跡か？）のもと考えられている。西ノ辻集落の墓地は、南へ広がると予想されている。

それぞれの周溝墓は、溝を共有あるいは切り合いながら連続して造られている。溝の中には墓前祭祀に使用した土器が大量に遺棄されており、長期間墓域として続いていた様子がうかがわれる。

9基の周溝墓は、後世の整地によって盛土部分が削平されており、主体部はほとんど残っていないが、4号墓で小児用と考えられる合口の甕棺1基が検出されたほか、9号墓で木棺1基が検出されている。家族墓としての性格をもった墓地であったことが想像される。（下村）



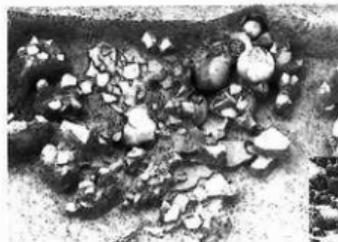
▲方形周溝墓群全景

◀方形周溝墓配置図



▲小児用合口甕棺

4号方形周溝墓のマウンドの中心から少し南へ下がった位置で検出された。甕棺の墓壙は、長径1m、短径50cmの楕円形を呈し、残存の深さ10cmを測る。大型の甕と中型の甕を合口にして、ほぼ水平に埋葬されている。



▲5号周溝墓南コーナー土器

出土状況

5号周溝墓は、長辺9m、短辺6.8mの形を呈しているが、その南コーナーは、大きく抉れており、その部分から壺・甕・鉢などの完形土器が大量に出土した。完形土器には体部下半に穿孔するものもあり、祭祀用の土器と思われる。

▼4号方形周溝墓全景

盛土は削られているが、ほぼ全体の形がわかる周溝墓である。短辺8.0m、長辺10.6mを測り、長方形を呈している。溝の幅は、0.7~1.0m、深さ15~80cmを測る。各コーナーは、それぞれ外側に突出して広がり、その部分に土器が多く出土している。



▼7号周溝墓の周溝内土器出土状況

全体の形はわからないが、幅1.5~1.6m、深さ75cmを測る溝が検出された。溝内には5~10cm大に細かく破砕された弥生土器片が、一面に間断なく出土した。土器は、何らかの目的のため人為的に打ち砕いて溝の中に遺棄したものと思われる。



## 出土遺物

第7次調査では、7基の方形周溝墓から1基の甕棺と、各周溝、土坑内から土器を始め、石器、土製品、鉄器、骨下、獣骨、炭化物が出土した。7次調査地の北側、南西側でも9次、26次調査で方形周溝墓の続きが確認され、26次調査では木棺墓が検出された。



▲26次調査出土木棺墓

〈土器〉 土器の出土状況は各周溝毎に少しづつ異なる。1号墓西溝や3号墓北西上層内から完形に近い土器や穿孔を受けたものが、他の土器片の中に並ぶように出土した。1号墓の状況から溝がほぼ埋没する時期に土器が並べられたものと考えられる。3号墓北溝下層内、北西溝では破片が溝全面に散布した状況がみられた。同周溝2層上面では、穿孔を受けた土器と共に出土した破片の中に、頸部のみ残存するものがある。脚部の出土例も各周溝内にみられる。

各周溝内の完形に近い土器には、日常容器のうち、中・小型のものがセットで出土している。中型品には、食卓用の「共用器」と呼ばれる細頸壺・高杯・水差・煮炊き用の甕・壺Dなどがある。大半の土器は底部に穿孔を受け、なかには口縁部が打ち欠かれたものがある。小型品には壺・甕付き無頸壺・把手付き鉢などがあり、穿孔のないものが多い。中でも、把手付き鉢（コップ）や水差は細頸壺から液体を注ぐ容器として、その出土量も通常では少ないことから祭儀用と考えられており、今回の調査では5点出土している。

弥生時代は、中国からの渡来人の生業（道具）、文化、思想（死生感）などの影響をぬきにしては考えられない。少なくとも弥生時代後期まで遡れる「魏志倭人伝」によれば、葬送儀礼に伴って歌舞飲酒する様から、使われた器物がかなりあったことが推測される。また、「魏志」東夷伝によれば、歌舞飲酒は葬送儀礼だけでなく、農耕儀礼にも伴うと記されている。

このような背景を通して、今回の調査の状況を見ると、すでに概報でも菅原が述べているが、今まで供献土器と考えられていた土器は、葬送儀礼に伴う歌舞飲酒に使用されたものの蓋然性が高いといえよう。田代氏はこのような土器を歌舞飲酒などの葬送儀礼に使用后、「再使用できないように一部を欠いたり、底などに孔をあけて、いわば靈魂の付き代となりえない状態にし廃棄された」もの、更に、小型の完形土器は供献土器かもしれないと述べられたことに合致する。また、破片は「土器破砕祭祀」に使われたと考える説の類例にもなるだろう。これらの土器は、概ね器表面が風化損耗しており、ある期間、風雨に晒されていたことを物語る。

完形の土器には大型の甕があり、内外面にみられる煤付着が葬送儀礼に関するのか、日常時の使用重なのかは判断ができない。あるいは溝内に埋葬した土器棺であったかもしれない。

4号墓の壺上部の小児棺は、大・中型の甕を合口にして水平に据えたものである。大型甕は「生駒西麓産の胎土」で形態・技法は河内型、中型甕は胎土が異なり、形態は大和型である。前述の土器にも「生駒西麓産の胎土」と異なり、形態・技法が大和、摂津系のものが見られる

▶ 3号墓北西溝内出土弥生土器（7次調査で5号墓南溝内出土としてとりあげた遺物は、26次調査で3号墓北西溝内のものと判明した。）



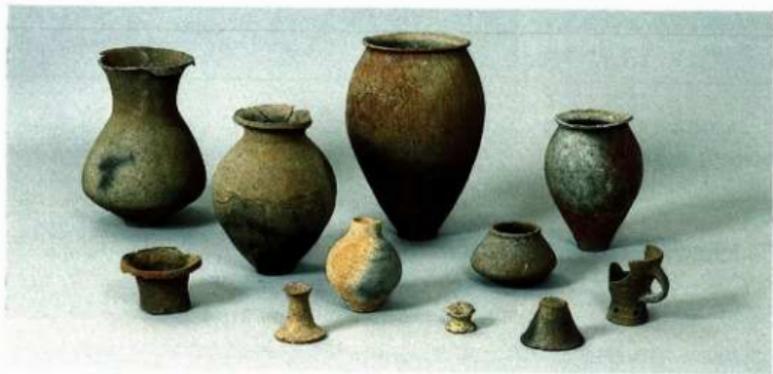
▼ 3号墓北溝内出土弥生土器  
 枠内=壺・把手付き鉢（現場で盗難にあらう）



が、完形品の中には少なく、破片に多く見られる。

1号墓近くの上層上面では、完形に近い壺Aが正立したままの状態での他の破片と共に出土している。葬送儀礼が行なわれた跡か、祭祀に使用後の廃棄坑の可能性が考えられる。

以上、出土した土器を型式学的に分類すると1・4号墓では第Ⅱ～Ⅳ様式、2号墓では第Ⅱ～Ⅲ（新）、3・5号墓では第Ⅲ（新）～Ⅳ様式、7号墓では第Ⅱ～Ⅲ（古）・Ⅳ様式に比定できる土器が埋葬に関係している。この時期差は、古くて保持期間の長い土器と、新しい土器と一緒に葬送儀礼に使用後、廃棄や供献したためか、後に追葬、祭祀儀礼が行なわれたためかのいずれかによるものと考えられる。



▲ 1号墓周溝内出土弥生土器



◀ 2号墓周溝内出土弥生土器



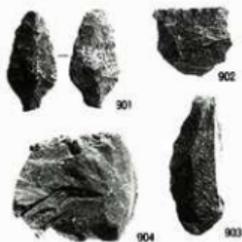
▲ 4号墓周溝内出土弥生土器



▲ 7号墓周溝内出土  
弥生土器



▶ 10号周溝・土坑内出土  
弥生土器

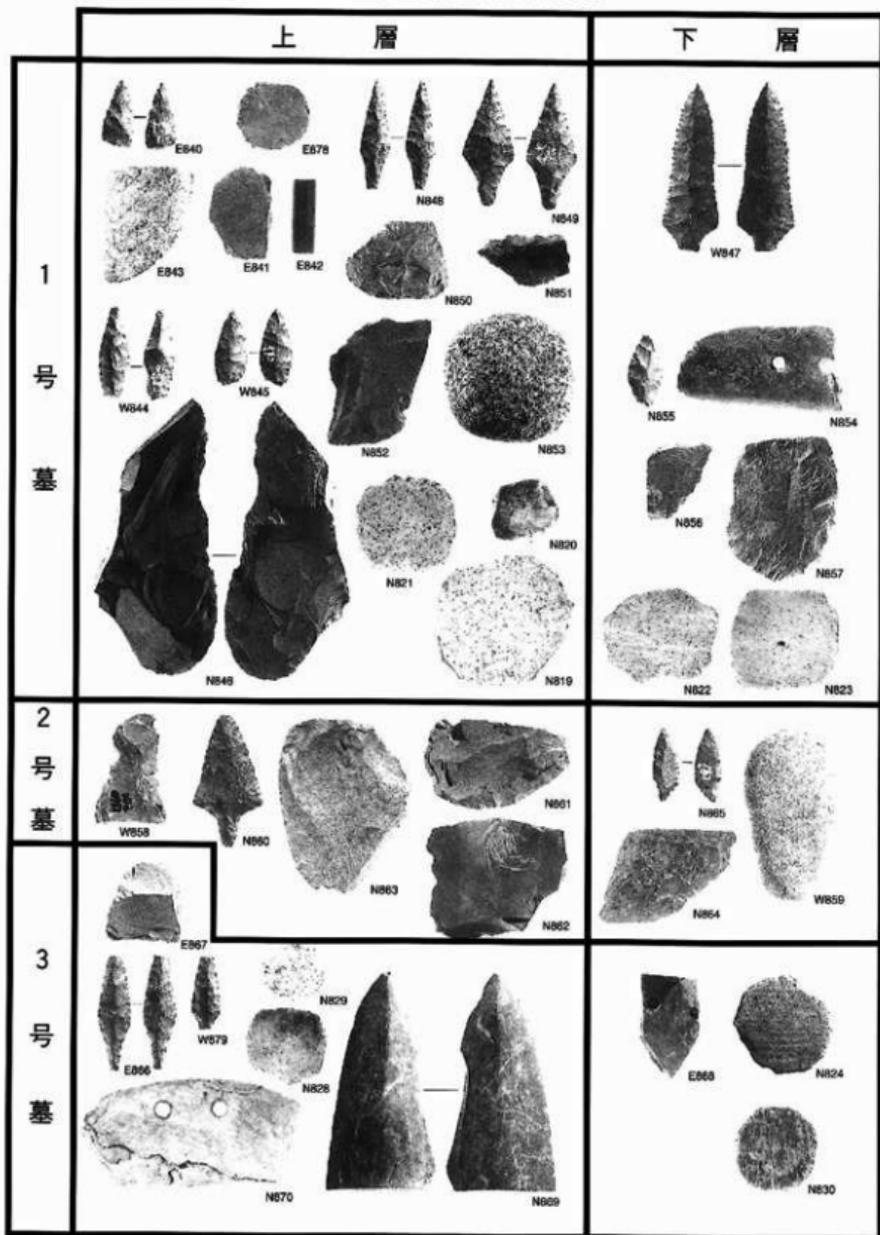


▲ 土坑内出土石器

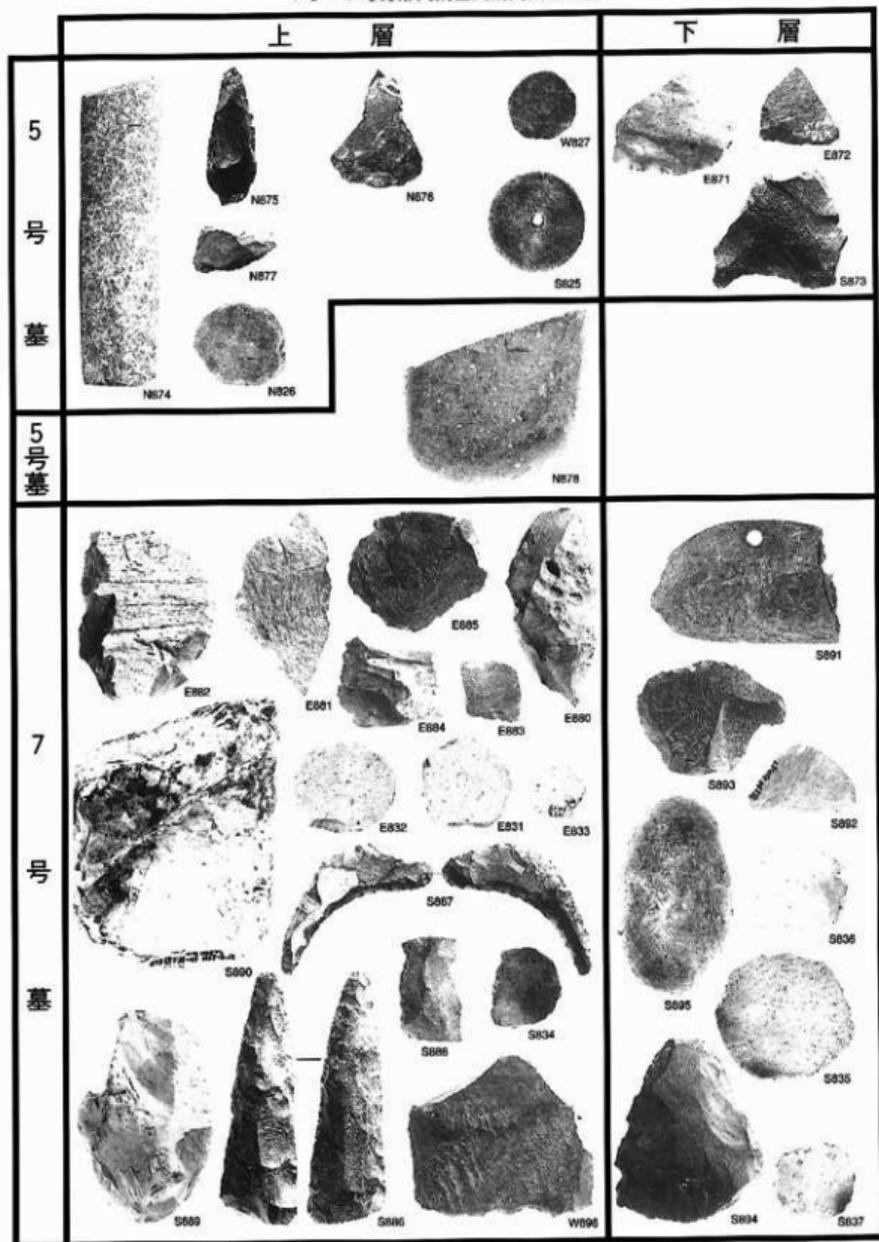


▲ 10号周溝内出土石器

▼ 1~3号方形周溝墓周溝内出土石器



▼ 5・7号方形周溝墓周溝内出土石器



＜その他の遺物＞ 各周溝内から土器と共に石器類、土製の紡錘車・円板、管玉などが出土した。石包丁、石斧、石剣などの磨製石器は全形を残すものは少なく、特に石包丁の損耗は激しい。

これらは日常的にかなり使いふるされたものといえる。打製石器では、石鎌は完全なものと、先端部を欠くものが見られ、1点は長さ6.9cmの大型品で完形のまま出土している。石小刀も1点完全なものがある。

中国では、石包丁・石鎌は紡錘車と共に副葬品の中に見られ、また九州地方の弥生時代中期の墓にも鏡・玉・武器などの副葬がみられるが、畿内では副葬品そのものが非常に少ない。石包丁の出土状態などを見ると、田代氏が言われるように、他の石器と共に何らかの葬送儀礼に使用したものかもしれない。

土製の紡錘車・円板が各周溝内から数点ずつ出土している。瓜生堂遺跡や恩智遺跡では主体部の掘方内にも見られる。後の古墳から発見される円板型土製品に通じるものか、魂に呼应しあう玉類として、葬送儀礼に使用された可能性も考えられる。また副葬品としてよく見られる管玉が1号墓東溝内から1点出土している。シルト製のものである。

鉄鎌が2号墓北溝内から1点出土した。全体の30%位にあたる先端部を欠く。大澤氏の金属学的調査結果によれば、錆化損傷がひどく国内鍛造品かどうかは不明であるが、原料は人降産の磁鉄鉱の可能性があり<sup>11.3</sup>。この時期の鉄鎌の出土例は少なく貴重品であっただろう。

動物遺体が出土しているが、遺存状態は悪い。榑野氏に鑑定を依頼したところイノシシ、シカ、イヌ、トリ、ウマなどの獣骨が判明した（ウマは後世のものかもしれない）。これらの遺体が方形周溝墓に関わるかどうかは、弥生時代の動物の扱いを検討する必要があると思われる。シカの角には焼焦げが認められた。鹿は弥生時代の銅鐸や土器絵画によく描かれており、靈歌と考えられていたという説もある。中国では犬はよく犠牲にされているが、隣接の鬼虎川遺跡の2号方形周溝墓からは主体部1基と、近くの盛土肩部から犬骨を埋葬した土壌が検出されている<sup>11.1</sup>。またイノシシも祭祀に使用された類例が多い。今回の動物遺体が、これらの類例のようなことが考えられるかどうかは判断できなく、今後の検討課題に残される。

今回の調査では木器の出土例がなく、炭化物が溝内の土層に混じる。鬼虎川・瓜生堂遺跡を始めとする墓域内からよく木製の鋤などが出土している<sup>11.1, 11.2</sup>。炭化物は墓壙の掘削に使用した木製の道具や葬送儀礼に使用した木製容器などを焼成した痕跡などが考えられる。また、後世の葬送儀礼の浄め火や送り火など、先に墓に行った人が火を焚くという風習に繋がるものかもしれない<sup>11.3</sup>。

西ノ辻遺跡の方形周溝墓域から離れた谷筋にも幼児棺（1才未満）の出土例が数例見られる。これは未完成の靈魂に対して、現在の沖縄各地に見られる墓の側に「袖垣」を作って死産児や変死者を埋めて、祖霊化する資格を持たないと考える習俗に似た死生感によるものだろうか。

以上、今回の調査は中世遺構で削平されて盛土部の状況がわからないが、周溝内の土器などを始め遺物の出土状況は平野部と、また隣接の鬼虎川遺跡とも少しづつ異なり、さらに同一遺跡内でも一様でない。これは弥生時代に中国からの様々な死生感の影響を受け入れつつも、次の古墳時代を築くまで柔軟に変遷していく過程であったと思われる。（曾我）

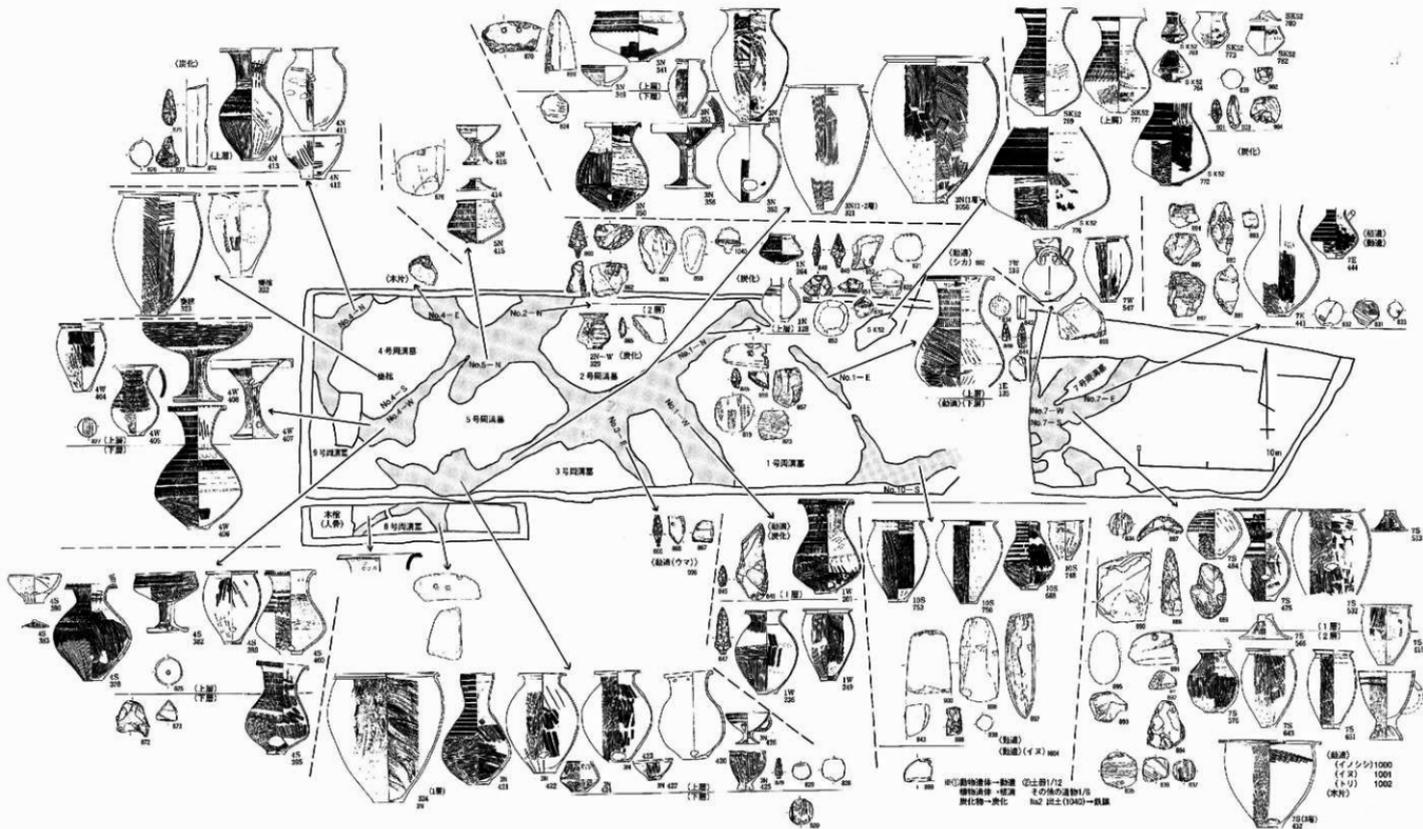


図1 方形周溝墓・周溝・土坑内出土遺物一覽圖

注・参考文献

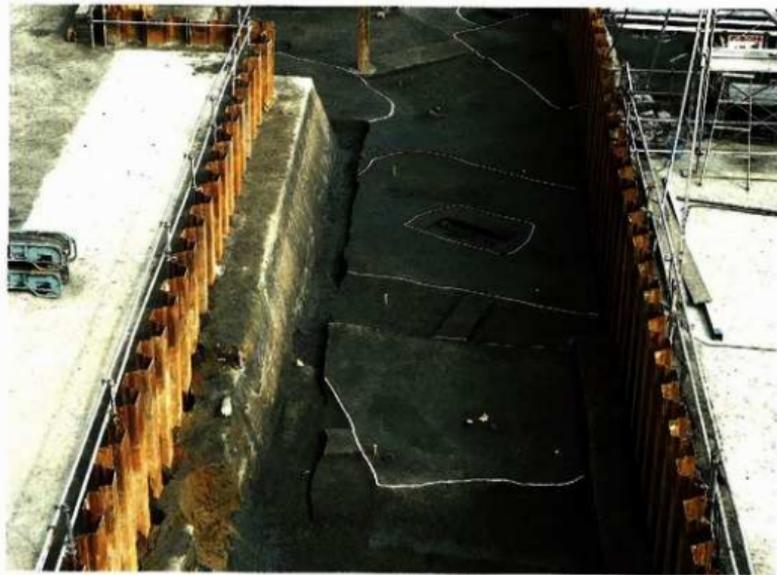
- 注1：才原金弘「西ノ辻遺跡第26次発掘調査概報」『(財)東大阪市文化財協会概報集1989年度』財団法人東大阪市文化財協会 1990
- 注2：佐原真「土器の用途と製作」『日本考古学を学ぶ(2) 原始・古代の生産と生活』大塚初暎・戸沢光剛・佐原真編 1979
- 注3：「西ノ辻遺跡・鬼虎川遺跡」—西ノ辻遺跡第6・7・8次調査、鬼虎川遺跡第18次調査概要報告書—東大阪市教育委員会・財団法人東大阪市文化財協会 1988
- 注4：田代克巳「方形周溝墓」『弥生時代の研究 8 祭と墓と装い』金岡 恕・佐原真編集 雄山閣 1987
- 注5：都築暢也・七原恵史他「朝日遺跡 1～IV」愛知県教育委員会 1982
- 注6：辻本宗久「弥生時代の墳墓について—大阪湾沿岸地域の資料を中心として—花園史学」花園史学会 1987
- 注7：佐川正敏・青山和夫「中国の石包丁」『考古学ジャーナル3』No260 .1986
- 注8：山代克巳「いわゆる方形周溝墓の供献土器について」『鳥越憲一郎博士古稀記念論文集』1985
- 注9：瓜生堂遺跡調査会 1981 『瓜生堂遺跡』、同 1980 『愚智遺跡』
- 注10：金岡 恕「弥生時代の宗教」『日本考古学論集 3 呪法と祭祀・信仰』1986
- 注11：上野利明・才原金弘「鬼刺川遺跡第12次発掘調査報告」(財)東大阪市文化財協会 東大阪市教育委員会 1987
- 注12：(財)大阪文化財センター『瓜生堂』1980
- 注13：高山 純「縄文時代の火に対する信仰」『古代文化』巻8号
- 注14：大島建彦「信仰と年中行事」『日本民俗学大系 7 生活と民俗』1985復刊(『旅と伝説』6の7)

## 5. 鬼虎川遺跡墓制

鬼虎川遺跡の墓は、1966年11月大阪外環状線の水道管敷設工事によって組合式木棺が発見され、初めてその存在が明らかになった。1980～1981年の第7次調査では新生児骨1体分を納めた土器棺が1基見つかった。1980年の第12次調査では方形周溝墓6基、木棺墓1基、土壙墓1基が見つかった。1983年の第19次調査では方形周溝墓が2基、1984年の第25次調査では土壙墓が1基、1985～1987年の第29・30次調査では方形周溝墓8基、土壙墓5基、1989年の第31次調査では方形周溝墓が1基、1989～1990年の第32次調査では方形周溝墓が5基、土壙墓が5基、土器棺墓が2基それぞれ見つかった。

鬼虎川遺跡の範囲は東大阪市西石切町5丁目、7丁目、弥生町、宝町を中心に東西640m、南北850mと推定されていて、墓域は遺跡の北ないしは北東に所在するものと考えられている。ただ一つの大きな墓地が広がっているものなのか二つ以上の墓域が存在するのか現在のところ明らかではない。

鬼虎川遺跡では、現在までに方形周溝墓27基、木棺墓1基、土壙墓12基、土器棺墓3基が見つかった。時期は弥生時代中期前半から後半にかけてのものである。方形周溝墓は中期前半から後半、土器棺墓と土壙墓は中期後半につくられたものである。現時点では墓域の西側で最初の築造が行なわれ、順次北及び東の方へ築造されていったと考えられる。



▲第23～26号方形周溝墓

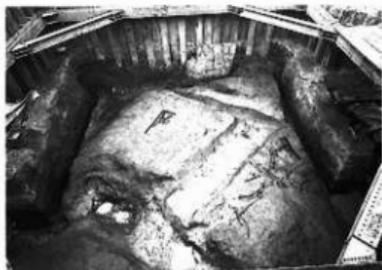
### 鬼虎川遺跡の方形周溝墓

方形周溝墓は平面形が方形・長方形で、周溝を溝で区画し、内部を上で盛り土して小さな墳丘をこしらえ、この墳丘に一人あるいは複数の埋葬を行なう墓で、最近では墳丘墓と呼んでいる。墳丘上や溝には供献用の土器を配置している。

主体部の埋葬は、盛り土がある程度進んだ段階で行なわれ、さらに上に盛り土して墳丘の仕上げを行なったものとみられる。

初期のものは木棺ではなく、自然木を直方体の枠に組み上げ、下に綱代を敷き遺体を置いている。木棺は組合式で、底板1枚、側板2枚、小口板2枚、蓋板1枚からなっている。小口板と底板の組み合わせ方は、墓床面に小口板を固定させるための溝を掘り、底板の両短辺側を「コ」の字形に切り取ってその部分に「T」字形の小口板を立てるものがほとんどである。底板の両端側に溝を掘り、底板の溝の上に小口板を立てる例は2例しか確認されていない。また、方形周溝墓の一番新しい時期(中期後半)に出現するものと考えられる。

木棺の材質はヒノキが多くみられる。コウヤマキは第5号方形周溝墓第1主体部の両小口板と第22号方形周溝墓の蓋板にみられるだけである。また第2号方形周溝墓の側板1枚にケヤキが使用されていた。いずれも中期前半の時期のものである。方形周溝墓の規模は、一覧表を見ていただければわかるように5m前後の小規模なものが多い。主体部は1基のものが多く9基あり、2基のものが6基(この内3基が墳丘上、残りは周溝に埋葬されている)で、3基以上のものは今のところ見つかっていない。



▲第2～4号方形周溝墓



▲第5号方形周溝墓



▲第6号方形周溝墓



▲第24号方形周溝墓



▲第23号方形周溝墓墳丘



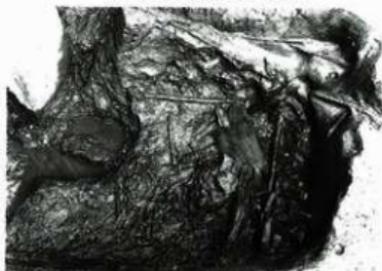
▲第20号方形周溝墓墳丘断面



▲第22号方形周溝墓主体部



▲第22号方形周溝墓墳丘断面



▲第19号方形周溝墓第2主体部



▲第19号方形周溝墓第2主体部の綱代



▲第19号方形周溝墓第1主体部



▲第19号方形周溝墓第1主体部掘形



▲第5号方形周满墓第1主体部



▲第20号方形周满墓



▲第2号方形周满墓第2主体部



▲第5号方形周满墓第2主体部



▲第2号方形周满墓第1主体部



▲第25号方形周满墓第2主体部



▲第23号方形周满墓第1主体部

手の位置は両手とも肩部に置くもの2基、腹に置くもの1基、大腿骨付近に置くもの1基、左手を首付近・右手を腹に置くもの1基、右手を首付近・左手不明のもの1基、左手を胸・右手を腰に置くもの1基、左手を右脇腹・右手を肩に置くもの1基、不明5基である。埋葬されていた人は成人男性7人、成人女性1人、成人女性または12~13才の男性1人、成人で性別不明1人、年令・性別不明3人となっている。

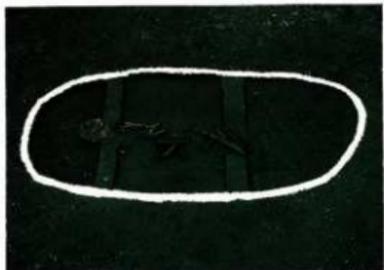
土器棺蓋は日常使用している壺や甕などを棺として利用し、中に乳幼児の遺体を入れ鉢や高杯などで蓋をして地面に埋めたもので3基見ついている。いずれも縄文時代から続くのもでもっとも一般的なものである。

鬼虎川遺跡より出土した棺材

名 称	蓋	側板	側板	小口板	小口板	底板
第2号方形周溝墓	ヒノキ	ケヤキ	ヒノキ	ヒノキ	ヒノキ	ヒノキ
第5号方形周溝墓1	ヒノキ	ヒノキ	ヒノキ	コウヤマキ	コウヤマキ	ヒノキ
第5号方形周溝墓2	ヒノキ					

墓番号	人骨番号	性	年 令	埋 葬 状 態				
				頭蓋	胴骨	右上肢骨	左上肢骨	下肢骨
2	1	女	成人	?	仰	伸	伸	屈
	2	?	小児(3~4歳)	?	?	屈(腹)?	屈(腹)?	屈
4	3	?	小児(4~5歳)	右下	?	?	?	?
5	4	男	熟年前半(40代)	底下	仰	屈(胸)	?	屈
	5	?	小児(3~4歳)	底下	仰	?	?	屈
6	6	?	成人	?	?	?	?	屈
7	7	女	成人	左下	仰	屈	屈(腹)?	屈
8	8	?	壮年後半(30代)	?	?	?	?	?
11	9							
13	10							
18	11							
19	12	?	小児?	?	?	?	?	?
	13	?	成人?	底下	仰	?	?	屈
20	14	?	6~10歳	底下	仰	屈(腹)?	?	屈
22	15	女	老年	右下	仰	屈(胸)?	屈(胸)?	?
23	16		成人	右下	仰	?	?	屈
	17	男	壮年前半(30代)	底下	仰	屈	屈	屈
24	18		成人	左下	仰	屈	屈	屈
25	19	男	成人	?	?	?	?	屈
	20	女	熟年前半(40代)	右下	仰	屈(腹)	屈	屈
26	21	?	乳児(1歳)	?	?	?	?	?
	22	女	壮年後半(30代)	底下	仰	屈	屈	屈

鬼虎川遺跡方形周溝墓出土人骨一覽表



▲木棺墓



▲第5号土墳墓



▲第7号土墳墓



▲第4号土墳墓



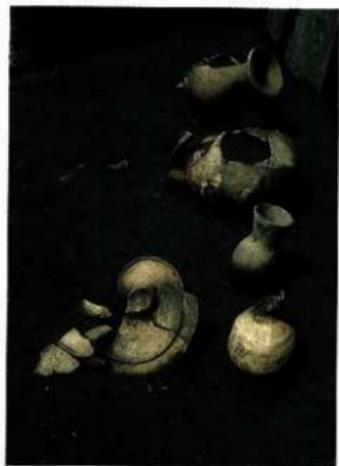
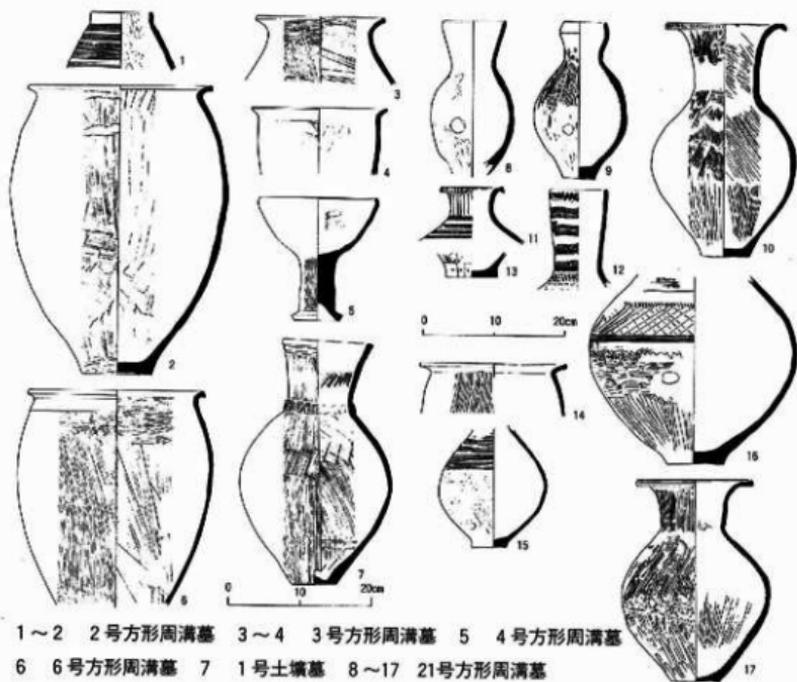
▲第10号土墳墓



▲第2号土墳墓



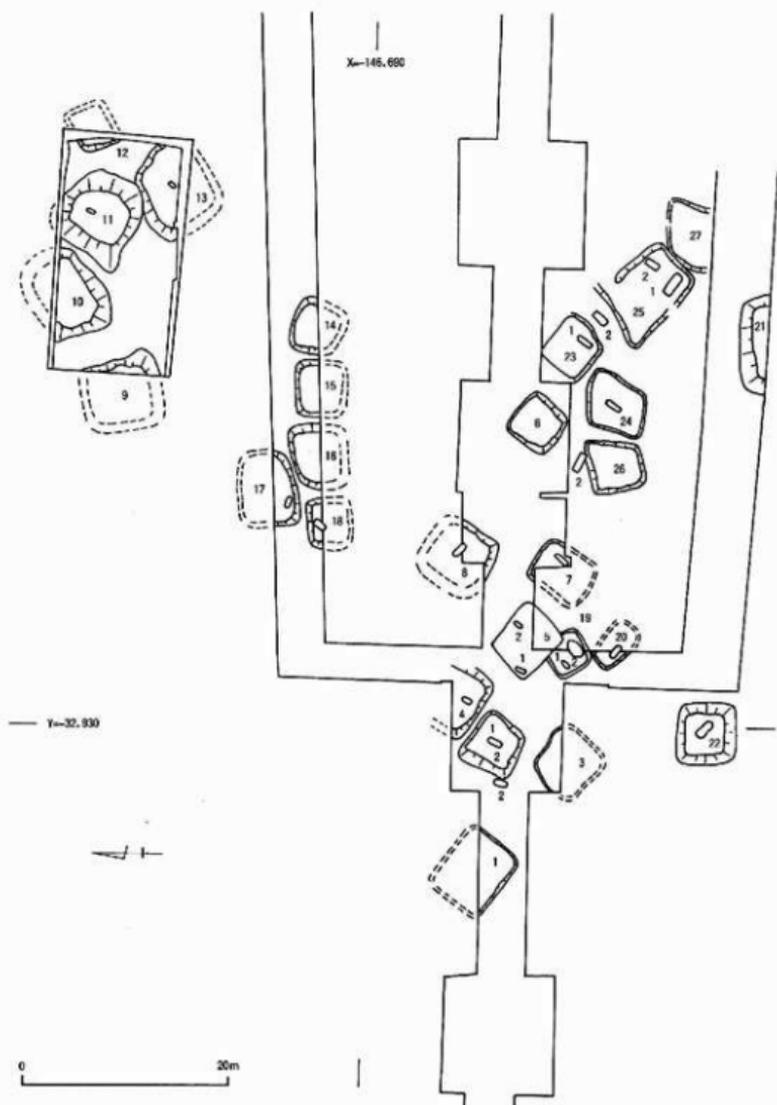
▲第9号土墳墓



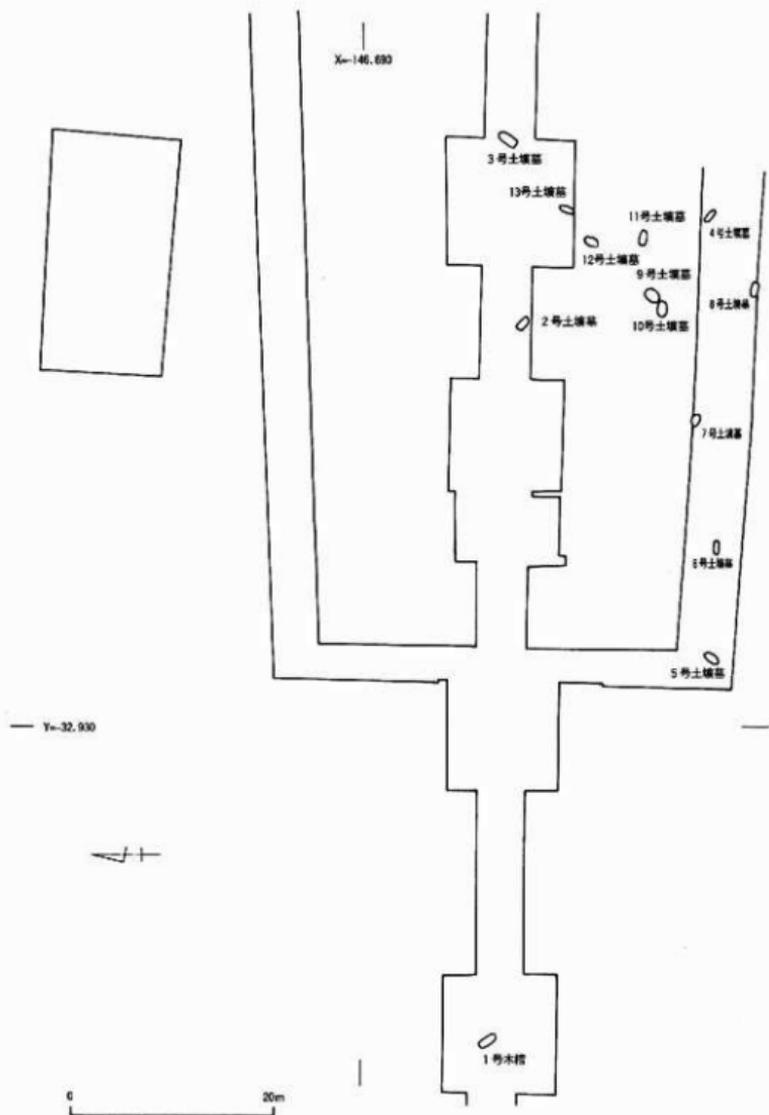
▲第21号方形周满墓供献土器



▲第21号方形周满墓供献土器



▲方形周溝墓の分布図



番号	墳丘形状	墳丘現高	高	墳丘方位	距離	深さ	主体部	[ ] の数字は第5表の入骨番号	備考
1	隅丸長方形	7.5m 以上	0.2m	N-65°-W N-90°-E	0.8m	0.3m~ 0.4m			・第12次調査(第1号方形副冨)
2	隅丸長方形	3.5m (北東) 4.3m (北東)	0.30m	N-50°-W N-30°-E	北東側 1.4m 南西側 1.6m 北西側 2.0m	0.45m 0.3m 0.6m	・[1]第1主体部墓壁の長さ1.02m幅0.63m深さ 0.05m長方形 S-30° W 木棺底板残存 ・[2]第2墓壁主体部墓壁の長さ1.15m幅0.62m 深さ0.4mで底面とし小口板の部分全幅0.1m深さ 0.2m2段に掘る 長方形 S-19° W 木棺は蓋、副板、小口板、底板が残る ・椁幕犬 墓壁の長さ0.81m幅0.41m深さ0.18m 長方形 S-30°-W		・人骨は仰臥屈肢 ・人骨は頭骨人頭骨が残存 ・南東副冨より奥が灰土 ・頸骨のみ ・第12次(2号)
3	隅丸長方形	5.0m以上 3.0m以上	3.8m	N-50°-W N-30°-E	北東側 2.5m 北西側 1.8m	0.5m 0.8m 0.5m			・調査北東側より 蓋、土、スコップ状蓋、調査北西側より土の層が出土 ・第12次(3号)
4	不明	3.2m以上	0.2m	N-57°-W	1.3m	0.45m	・[3]墓壁残存長0.6m幅0.5m深さ0.07m長方形 S-28°-W		・人骨は頸骨のみ ・第12次(4号)
5	隅丸長方形	4.3m (北東)	0.30m	N-60°-W N-45°-E	北西側 0.95m 南東側 3m (上面) 1.2m (下面)	0.3m	・[4]第1主体部墓壁の長さ1.5m幅0.6m深さ 0.38m小口板の部分のみ幅0.21m深さ0.33mで 2段に掘る 長方形 S-29°-W 木棺は蓋板、小口板、底板が残る ・[5]第2主体部墓壁の長さ0.8m幅0.44m深さ 0.3m 長方形 S-37° W 木棺は蓋のみ		・人骨は仰臥屈肢 ・第1主体部の南東墳丘上で溝状出土 ・人骨は頸骨、大腿骨 仰臥屈肢 ・第12次(5号) ・第29・30次(6号)
6	隅丸長方形	4.3m (北東) 3.8m (南東)	0.3m	N-60°-W N-35°-E	北東側 0.8m	0.25m	・[6]墓壁の長さ1.28m幅0.63m 長方形 N 50°-E 木棺痕跡なし		・人骨は胸骨より下半身屈肢 ・南西側副冨より奥 ・第12次(4号)
7	隅丸長方形	3.0m以上 (南) 1.5m以上	0.40m	N-60°-W N-30°-E	2.0m	0.30m	・[7]墓壁の長さ1.72m幅0.91m深さ0.52m 隅丸長方形 N-46°-E 木棺は木口板の一部 のみ 北側木口板0.5m 南側小口板0.45m 東・西側副板1.5m		・人骨は肋骨を除き 残存 仰臥屈肢 ・第19次(7号)
8	不明	1.5m以上 3.2m以上	0.60m	N-60°-W N-30°-E	2.2m	0.50m	・[8]墓壁の長さ0.41m以上(幅0.7m) 隅丸長方形 S 62°-E		・人骨 頭骨のみ ・第19次(8号)
9	不明	4.8m以上 3.2m以上		N-17°-W					
10	隅丸長方形	5.6m 4.5m	0.5m	N-58°-E N-38°-W					
11	隅丸長方形	5.0m 4.3m		N-31°-E N-62°-E			・[9]中央北寄りに1体		
12	隅丸長方形	4m 1.5m以上		N-8°-W					
13	隅丸長方形	5.0m 4.5m以上					・[10]はL型中央に1体		
14	隅丸長方形	東側 3m 南側 2m		S-74°-E N-29°-E	0.9m				・第29・30次(1号)
15	隅丸長方形	東側0.4m 1.5m	0.60m	N-88°-W					・第29・30次(2号)
16	隅丸長方形	東側7.6m 南側3.9m	0.30m	N-76°-E					・第29・30次(3号)

番号	遺存形状	頂広形状	高	境庄名称	調査地	深さ	主体部	[ ] の数字は人骨長の人骨番号	備 考
17	隅丸長方形	東西0.9m 南北1.5m	0.5m	N-80°-E					・第29・30次(4号)
18	隅丸長方形	3.0m 1.3m	0.5m				・[11]木棺は黄板、銅板、小口板、底板が残る S-35°-W (副位)	・人骨 大腸骨 ・第29・30次(5号)	
19	隅丸方形	4.2m以上 3.7m以上	0.3m	N-35°-E N-35° W	不明	不明	・[12]第1土葬部墓道の長さ0.85m幅0.42m深さ0.05m 木棺は長さ0.87m 幅0.23mの組み合わせ式 ・[13]第2土葬部墓道の長さ1.5m幅1.0m深さ0.7m 自然木を組み合わせた長さ1.3m幅0.7m深さ0.45m の作成面に副位を敷く 遺体の方位 N 67°-E	・人骨 小骨片のみ ・第29・30次(7号) ・第32次(19号)	
20	不明	4.3m以上 2.4m以上	0.5m	N-35°-W N-55°-E	不明	不明	・[14]墓道の長さ1.5m幅0.6m新合式木棺で蓋板、黄板、小口板、底板が残る。S-54°-E	・人骨は2完存 頸 路周辺に赤色顔料 ・第29・30次(8号)	
21	隅丸長方形	1.5m以上 0.6m	0.1- 0.4m	N-5°-W N-80°-E	不明	不明		・第29・30次(9号)	
22	不明	2.4m以上	不明	不明	東部0.9m 以上	0.95m	・[15]木棺の蓋板幅0.72m現存長1.05m東西面精板 幅0.26m 現存長0.98m 南東部小口板上 面0.41m 下面幅0.33m 現存長さ0.28m 北東部黄板の一部 底板幅0.65m現存長さ0.97m	・木棺の新築内寸 幅0.56m深さ0.25 m長さ1.4m木棺の 主位S-36°-E ・第31次	
23	不明	上 3.8m以上 4.5m Y 4.2m以上 0.4m	0.4 - 0.6m	N-50°-W N-35° E	南側1.5m 南東 2.5- 3.5m	0.2m 0.4m	・[16]第1土葬部墓道の長さ1.62m 幅0.65m小 口板の部分は2段に跨る 長方形 ・[17]第2土葬部墓道の長さ1.75m 幅0.78m 木棺の長さ1.7m 幅0.8m	・胸臥位 ・仰臥位 ・第32次(23号)	
24	不明	上 5.0m 5.5m以上 F 5.1m以上 3.5m以上	0.5m	N-50°-W N-35°-E	1-2m 境庄賢 部から 1.6m		・[18]墓道の長さ1.5m 幅0.5m 遺体の方位 N-32°-E 東側黄板のみ残存	・人骨は全身が残る 胸臥位 ・第32次(24号)	
25	不明	上 7.0m 0.6m F 7.5m 0.2m	0.3m	N-50°-W N-60°-E	西側 3.7m	0.3m	・[19]第1土葬部墓道 長さ2.95m以上 幅0.5m 深さ0.18m 遺体の方位 S-31° R 木棺底板のみ残存 ・[20]第2土葬部墓道 長さ1.3 幅0.63 深さ0.19m 遺体の方位 N-37°-E	・人骨は大腸部以下 残存 背臥位 ・胸臥位 ・第32次(25号)	
26	不明	上 5.0m 5.6m以上 F 6.0m 5.5m以上	1.5m	N-5°-W N-70°-E	西側 2.1m	遺存遺 部から 0.85m	・[21]第1土葬部は中央部で1段ぐらいの乳肥 骨 墓誌不明 ・[22]第2土葬部墓道 長さ2.03m幅0.75m 深さ0.15m 遺体の方位 S 63°-E 木棺は底板のみ残存 長さ1.9m 幅0.6m	・産のみ残存 ・背臥位 ・第32次(26号)	
27	長方形	上 5.9m 3.0m以上 F 6.5m 3.5m以上		不明 N-20°-E	西側 0.8m	0.85m	・不明	・第32次(27号)	

## 6. 鬼虎川遺跡の遺構と遺物

鬼虎川遺跡は、昭和50年に第1次発掘調査が実施され、現在では30数次に及ぶ。近年までの調査成果を踏まえて当遺跡を概観したい。当遺跡の南は微高地が形成されており、居住区跡が確認されている。建物跡、井戸、土壌などの生活に関連した遺構や遺物が見つかっている。

竪穴住居は確認されていないが、掘立柱建物の柱などが多く残っていた。また、微高地の縁辺部には貝塚が帯状に広がっており、淡水産の貝を主体として海水産・汽水産のものも出土している。微高地より西は低くなっている。杭列や杭群が検出されており、水田遺構と考えられている。

今回、鉄道東大阪線建設工事に伴って実施した本遺跡の発掘調査では、多くの成果が得られている。発掘調査地は本遺跡の北側に位置し、遺跡を東西に貫く状況であった。調査地を大きく二分すると東は墓域、西は集落の縁辺であることが確認できた。

本遺跡の墓については、前文で記しているので省略する。墓以外の遺構は環濠と考えられる大溝、溝、杭群、井戸などがある。環濠と考えられる大溝は3条あり、東西方向で確認している。環濠の幅は約5～6m、深さ約2mを測る大規模なものである。西地区では検出していないので、途中で南に曲がるものと思われる。環濠の時期は、出土遺物より第Ⅱ様式である。第



鬼虎川遺跡の環濠



▲欄柱断面



▲欄列



▲溝屑の大株

33次発掘調査では、各環濠が同時期に機能していたことが確認されている。また、環濠間には大小のピットや杭が無数に打ち込まれており、欄列などの防御用施設と考えられる。環濠より外側では数条の溝を検出しているが性格は不明である。環濠や溝の屑で多くの木株を確認しており、樹木が点々とあったことが窺える。

木遺跡からは多種多様の遺物が発見されている。第Ⅰ～Ⅳ様式の遺物が主流であるが、第Ⅴ様式のものも少量ある。弥生土器・木製品・石器・土製品・金属製品・骨角牙製品・動物遺体・植物遺体などがある。

木製品は農耕具・工具・武器・生活用具・運搬具・祭祀具などが出土している。製品だけでなく未成品も多く見られ当遺跡内で作られていたことが窺われる。農耕具は柄の着いた状態の鋏や鋤も多くある。また、補助的なものでは田下駄・堅杵・臼などがある。弥生時代の農耕を考える上では貴重な資料となっている。

工具は大型蛤刃石斧の装着された柄や手斧の柄などが出土している。武器は弓が多いが朱塗りの盾や矢柄の着いたものがある。矢柄の着いた石鏃は2例あり、桜櫓が残る。土製品は木製



▲環濠出土弥生土器



▲小型瓢形壺

の軸が着いた状態で紡錘車が見つかっており、機織具の新知見が得られている。

金属製品では鉄鏝が錆のない状態で出土している。また、金属製品を鋳造した鑄型も発見されている。石製の銅鑄型・銅鍍鑄型などがある。動物遺体は、鹿や猪の骨などが大量に出土している。獲物は食料となった後、骨、角、牙も製品として加工し、無駄なく利用されている。製品には刺突具・針・腕輪・須などがある。

本遺跡は、地表下3～4 mに埋まっており、他の遺跡では残りにくい遺物が多く発見されている。弥生時代の生活を考える上では貴重な資料をもたらしてくれる。 (才原)



▲矢柄付石鏃



▲鏃

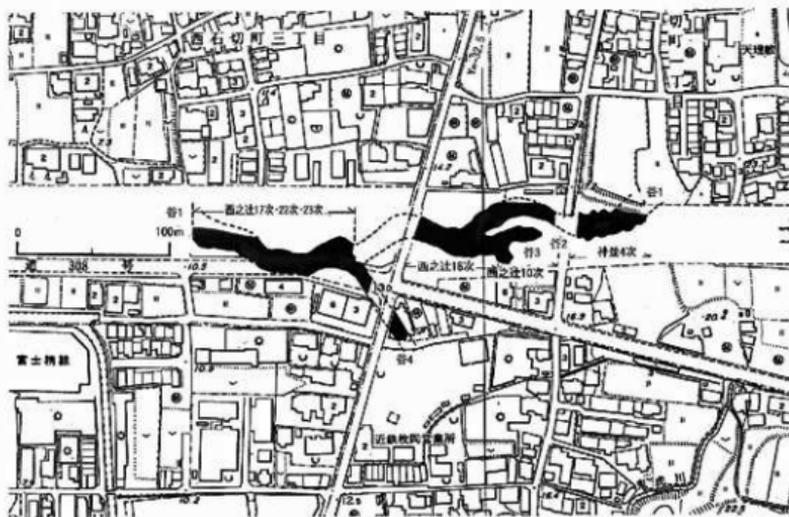


▲鉞

## 7. 神並・西ノ辻遺跡の谷

神並・西ノ辻遺跡の発掘調査によって、調査地内を東西にはしる縄文・古墳時代の谷が検出された。上流より続くこの谷は、蛇行を繰返しながら神並・西ノ辻遺跡内を西流し、調査地西端で北西に流れを変えている。谷1と呼称され、幅7～10m、深さ2.5～3.5m、発掘された長さ約150mを測る。この谷1に合流する谷4は、幅8m、深さ2mの規模で南東より続くものである。また、神並遺跡では谷1に先行して形成された局所的な谷状地形も検出されている(谷2・谷3)。これらの谷の形成時期は、谷1最下層出土の晩期縄文土器や谷1肩部出土の後期縄文土器によって縄文時代後期～晩期と考えられる。谷1と合流する谷4も同時代に形成されたものとみられ、谷2・谷3についてもさほど時期は遅くないと推定される。

縄文時代の堆積層は、谷1・谷4では直径1～数センチの礫を主体とする砂礫と植物遺体を含むシルトとが互層をなして厚さ約1m続いている。出土土器はごく少数で、他に多量のドングリが検出された。弥生時代の堆積層も最下層は縄文時代と酷似する砂礫・シルトの互層であるが、下層になると堆積層に細粒砂・シルトの占める割合が大きくなる。最下層～下層からは少数の前期弥生土器、多量の中期弥生土器が出土し、石器・木器・動植物遺体なども出土した。これらの遺物は、谷4との合流部以東ではしだいに希薄となるが、これは集落の東方へのひろがりが見られたことによる。合流部以西の弥生時代堆積層の中層にみられる黒色シルト質粘土は、主として谷の岸近くに堆積したもので、この層の形成には人為による廃棄物投棄とのかかわりが推定される。弥生時代中期後半の土器が多量に出土した。また、下面において小児川の董棺



▲発掘された谷(1/2500)



◀  
西ノ辻遺跡第16次調査地  
西端部における谷1堆積  
層断面、谷4との合流部  
以東の縄文～奈良時代の  
堆積層を東より撮影



◀  
西ノ辻遺跡第16次調査で  
検出された谷の全景、枝  
分かれの部の右は谷1  
左は谷2・3  
西より撮影



◀  
西ノ辻遺跡第16次調査に  
おける谷1内の弥生土器  
出土状況  
谷底より弥生時代中期末  
～後期初めの土器がまと  
まって出土  
東より撮影



◀  
西ノ辻遺跡第23次調査で  
検出された甕棺墓  
甕内第IV様式の甕を使用  
し蓋には別の甕と壺胴部  
片を使用



▲西ノ辻遺跡第23次調査で検出された甕棺内の新生児骨



▲西ノ辻遺跡第23次調査で検出された木器未製品

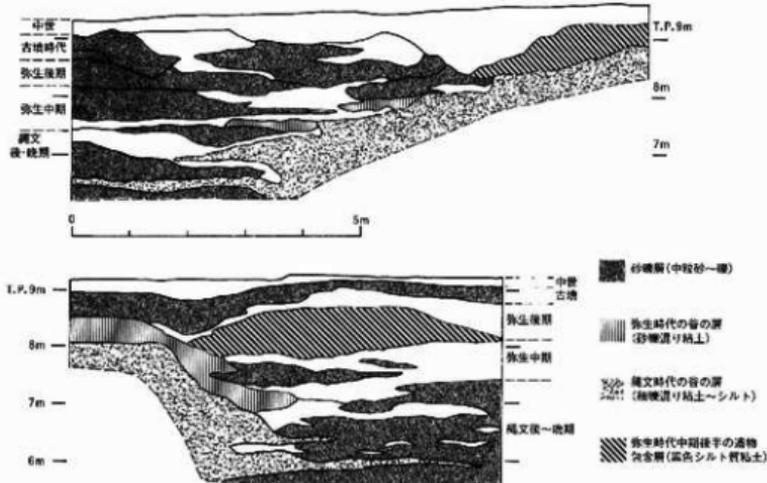
や甕棺、木器未製品貯蔵穴などの遺構が検出されたことから、この時期の谷流路の幅は前代よりも狭くなっていたと知られる。いっぽう、合流部以東の谷1では、同様の堆積層より弥生時代中期末～後期初めの土器がまとまって出土したが、ここでは谷の埋積が合流部以西よりもさらに進んだ状態である。谷1の埋積はその後も続き、弥生時代堆積層の上層として谷岸部にシルト、流路部に砂礫が弥生時代後期の土器と共に堆積している。古墳時代になると、合流部以東の谷1は浅谷になって谷岸にプール状の水利施設が作られるが、合流部以西では谷4からの流路が依然として維持され、上流より2次堆積の須恵器・土師器を含む砂礫が供給されている。神並・西ノ辻遺跡の谷が完全に埋積される時期は、合流部以東が奈良時代、以西が奈良～中世と考えられる。その後は中世の集落が全面に

広がり、谷の痕跡は残されていない。

谷1の兩岸において、弥生時代中期後半の土器を使用した壺棺墓や甕棺墓が多数検出された。壺棺には口縁部を打欠いたものや胴部に焼成後の穿孔をもつものが使用され、甕棺には比較的大型の甕がそのままの姿で転用されている。また、これらの棺の開口部分には蓋として別の土器片が用いられている。棺内に遺存する人骨の鑑定結果によると、甕棺は生まれて間もなく亡くなった新生児のために、壺棺はそれよりもやや大きい幼児のために用いられたと考えられる。これら、河岸の幼児墓に対して、鬼虎川遺跡第12次調査において方形周溝墓主体部より検出された3例の小児骨の年齢は少なくとも3～4才と推定されている。両者を比較すれば成人のための墓地への埋葬にはある種の通過儀礼にもとづく一定の年齢制限があったものと思われる。(宇本)



▲西ノ辻遺跡第23次調査で検出された谷1(東より)



▲谷1の土層断面図—西ノ辻遺跡第23次調査西端部 北壁(上)、西壁(下)

## 8. 神並・西ノ辻・鬼虎川遺跡の建物跡と遺物

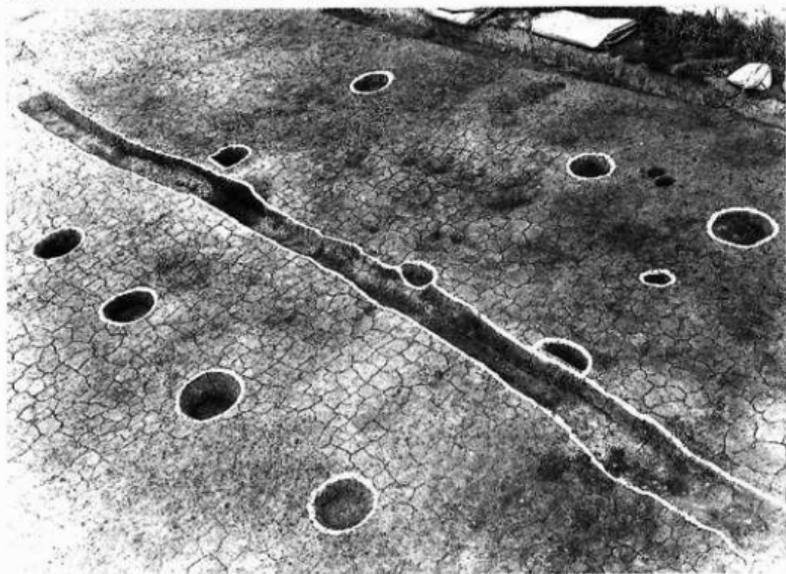
国道308号線関係の発掘調査では、神並遺跡・西ノ辻遺跡・鬼虎川遺跡から古墳時代中期末から後期初頭頃（5世紀後半から6世紀初頭）の遺構・遺物が多量に検出されている。神並遺跡・西ノ辻遺跡・鬼虎川遺跡からは、古墳時代の集落跡・谷内に築造した水利施設などの遺構や土器類をはじめとして木製品・金属製品・石製品・土製品などが多量に出土している。ここでは、水利施設や谷の概要は別稿に譲り、主に集落跡と出土遺物を取り上げることにする。

3遺跡において確認できた古墳時代の集落跡は、出土している土器類から古墳時代中期末から後期前半頃（5世紀末から6世紀前半）の時期に該当し、比較的短期間に営まれたものである。

また、古墳時代の初め頃や古墳時代後期中頃以降の遺構・遺物はほとんど認められない。このような様相は、この3遺跡と同様な位置に立地する日下遺跡・芝ヶ丘遺跡・横附遺跡・鬼塚遺跡・市尻遺跡・縄手遺跡においても看取できる。

3遺跡内には、東から西に向かって流下する谷があり、この谷に挟まれた高所に集落が展開していたものと推定できる。調査地点が、3遺跡ともこの谷筋にあたるため、建物の検出例は少ない。

次に3遺跡で検出できた同期の遺構について個別に記述していくことにする。神並遺跡では第3次・5次調査でそれぞれ1棟の掘立柱建物を検出している。第3次調査では、東西2間、



▲神並遺跡の掘立柱建物

遺跡名	調査回数	建物名	東西 規模	南北 規模	東西 寸法	南北 寸法	掘立柱 間寸法	梁間柱 間寸法	面積	時期	備考
鬼虎川遺跡	22次調査		2	3	6.5	3.8	2.2	1.9	24.7	5世紀末	総柱
鬼虎川遺跡	23次調査	建物1	2	2	3.48	3.48	1.74	1.74	12.1104	古墳時代中期	
鬼虎川遺跡	23次調査	建物2	2	2	2.88	2.76	1.44	1.38	7.9488	古墳時代中期	
鬼虎川遺跡	23次調査	建物1	2	2	3.96	3.72	1.98	1.86	14.7312	古墳時代後期	南面崩
鬼虎川遺跡	23次調査	建物2	2		3.24		1.62		0	古墳時代後期	
鬼虎川遺跡	8次調査	建物1	2	1+	3.7	1.6	1.9	1.6	5.92	5世紀後半	柱根・根石
鬼虎川遺跡	8次調査	建物2	2	2	3.7	3.5	1.9	1.8	12.96	5世紀後半	根石
市尻遺跡	1次調査										
市尻遺跡	1次調査										
市尻遺跡	1次調査										
芝ヶ丘遺跡	4次調査	建物1	3	3	7.5	7.5	2.5	2.5	56.25	5世紀末	柱根・根石
芝ヶ丘遺跡	5次調査	建物1		3		5.4		1.8	0	5世紀末	柱根
神並遺跡	13次調査	建物1	2	3	2.64	5.2	1.8	1.5	13.728	古墳時代中期	
神並遺跡	13次調査	建物2	2	3	5.52	4.4	2.2	1.6	24.288	古墳時代中期	
神並遺跡	3次調査	掘立柱建物1	2	3	4.5	3.79	1.5	1.8	17.065	5世紀末	総柱
神並遺跡	5次調査	建物1	3	5	5.0	8.4	1.66	1.68	42	5世紀末	
西ノ口遺跡	1次調査	SB1	3	2	5.0	4.1	1.6	2.1	20.5	6世紀前半	
西ノ口遺跡	1次調査	SB2	3	3	3.7	3.6	1.2	1.2	13.32	6世紀前半	
西ノ口遺跡	1次調査	SB3	2	3+	4.5	3.7	1.5	1.8	16.65	6世紀	
西ノ口遺跡	1次調査	SB4	3	2	3.4	3.0	1.1	1.5	10.2	6世紀	
西ノ口遺跡	1次調査	SB5	2	2	3.8	3.4	1.9	1.7	12.92	6世紀	
西岩田遺跡			2	1+	3.8	2.9	1.9	2.9	11.02	5世紀末	
西岩田遺跡			3	1+	4.85	0.65	1.6	0.65	3.1525	6世紀後半	
西岩田遺跡			2	1+	2.05	1.8	1.0	1.8	3.69	6世紀後半	
西岩田遺跡	11次調査	掘立柱建物		2		3.2		1.6	0	古墳時代後期	

### ▲東大阪市内検出の掘立柱建物一覧表

南北3間の総柱の建物を確認している。建物の北側約5mには、建物の梁方向とは一致しないものの東西方向にのびる溝がある。建物を構成する柱穴は、径約50cmの楕円形を呈する。第5次調査で確認している掘立柱建物は、東西3間、南北5間の大規模なものである。

鬼虎川遺跡では、5棟の建物を確認している。この内の2棟は、第23次調査で検出したものである。2棟の規模は、東西2間、南北2間で同一であるが建物方位は一致していない。建物を構成する柱穴は、径約80cmの楕円形を呈する。また、同じ調査で検出している1棟の建物は東西2間、南北2間の規模をなす。この建物の南北方向の柱列のうち中央の柱は、小型で柱列よりやや外方に突出している。また、建物の西側には、廂がある。さらに他の場所と区画するように建物の東西方向と南側には、同時期の溝が存在している。この区画の北寄り部分には、



▲出土遺物(土器類)

さらに別の建物1棟が存在する。建物を構成する柱穴は、60cm前後の楕円形を呈し、柱根の現存するものもある。また、柱穴の底面に根石を据えるものも確認している。柱根から見ると柱は円柱を用いている。第22次調査では、東西2間、南北3間の規模の総柱建物を1棟確認している。建物の北側には、建物と同一方位で東西方向に11間以上続く横列と、これに平行してのびる溝がある。

#### 遺物

神並遺跡・西ノ辻遺跡・鬼虎川遺跡の3遺跡から出土している遺物には、古墳時代中期末から6世紀前半頃の土器類をはじめ木製品・金属製品・石製品・土製品などが多量にある。しかしながら、古墳時代前期の庄内式・布留式土器は、まったく含まない。また、6世紀後半期の遺物も極めて少量出土しているにすぎない。

5世紀末から6世紀初頭頃は、朝鮮半島からの渡来人の移住によってもたらされた新たな諸技術・習慣・思想によって様々な生活用具が加わってくる。このことを3遺跡から出土している遺物によって眺めることにしよう。出土遺物の中には、生駒西館部で製作されたものをはじめ国内の他地域で生産されたもの、朝鮮半島から直接持ち込まれたものなどが含まれている。

出土している土器類には、土師器・須恵器・韓式系土器・陶質土器・製塩土器などがある。これらの内、最も出土量の多いのは土師器で、韓式系土器・陶質土器の出土量は、少量にすぎない。

土師器には、煮沸用の甕・甌・鍋、供膳用の杯・高杯、貯蔵用の壺などがある。出土量の多いのは、煮沸用の甕類で、次いで供膳用の高杯をあげることができる。貯蔵用の甕類は、小型のものが少量出土しているのみである。これらの器種構成は、後述する須恵器との相互関係によって成り立っており、古墳時代後期以降の容器構成上での土師器の位置付けを決定するものである。胎土から見て生駒西麓産のものや他地域の製品も出土している。ほか甕類には、法量的な分化が認められる。体部は長胴化しており、この時期から普遍化してくる甕との対応を考えることができる。体部外面は、ハケメやナデ調整で仕上げる。内面調整には、ハケメ調整・ナデ調整やヘラケズリ調整があり、前者の手法が主体となっている。甌・鍋は、この時期に出現するもので、体部側面に牛角状の把手がつく。このような形態は、国内の土器からの系譜を遡ることはできず、その起源を朝鮮半島に求めることができる。また、大型の甕の出現は、これまでの加熱調理の中に、本格的な「蒸す」調理法の採用という調理上での大きな変革と捉えることができる。しかしながら、その出土量は、あまり目立つものではないことから、「蒸す」調理法は、その対象素材、2次加工工程、使用状況について今後さらに把握していく必要がある。高杯や杯には、法量が同一規格で赤褐色の色調を呈し、器体に黒斑の認められないものが多数ある。



▲ 鍋造鉄釜

須恵器は、杯・甕・高杯・器台・甕・甌・鍋などの供膳用、貯蔵用の器種が認められる。土師器に比べると、その出土量は少ない。杯類は、個人用の食器と考えられており、これまでの容器の性格には存在していなかったもので、前述した土師器の甌とともに新たな食生活の開始を端的に示すものである。

陶質土器は、体部外面に平行タタキメと格子目タタキがあり、さらにその上に陶綫が巡っている。

韓式系土器には、煮沸用の甕類・甌・鍋・移動式甕・平底鉢などの器形がある。器体外面には、平行・格子・縄文のタタキメを残す。

タタキメは、格子のものが最も多い。胎土からみて、生駒西麓で製作されたもののほかに他地域産の製品もある。

製塩土器は、倒卵形を呈する薄いつくりで、



▲盾持人物埴輪

器体外面をナデ調整するものや平行タタキメを残すものがある。出土量は、前者が圧倒的に多い。すべて他地域産の製品である。

土器以外の土製品として埴輪や紡錘車などがある。

埴輪には、盾をもった人物埴輪が2点出土している。2点とも大きさ・形態・製作手法が極めて近似している。紡錘車は、土師質で側面形が算盤玉形を呈する。同形態のものは、古墳時代中期はじめ頃までにはなく、須恵器が日本で採用されはじめる時期に限って存在する。四内では、市内の鬼塚遺跡・大阪府陶邑深田遺跡・香川県宮山窟・福岡県池の上墳墓群などに見られるとともに、朝鮮半島にもその類例がある。

金属製品の主な出土遺物としては、鑄造鉄斧・小型素文鏡がある。鑄造鉄斧は、朝鮮半島や北九州から中四・四国地方の古墳や祭祀遺跡から出土することは知られていたが、畿内の集落内から出土する例のほとんどない遺物であり注目する必要がある。

また、金属製品に関連するものとして輪羽口・鉄滓・炉壁などの鍛冶関連遺物をあげることができる。これらの遺物は、極めて微量出土しているのみであるが、集落内に小規模ながら鍛冶工房の存在していたことを示している。

石製品には、滑石製の双孔円板・勾玉・剣形などがある。木製品には全く確認されていない。木製品の中にも石製品同様の祭祀関連遺物がある。

以上のように、神並遺跡・西ノ辻遺跡・鬼虎川遺跡の3遺跡で確認できた古墳時代中期末から後期初頭頃の遺構・遺物について概観してきた。今回の調査では、古墳時代の集落の空間的な拡がりをも十分捉えることはできなかったものの、その一端を検出した遺構・遺物から垣間見ることができた。

即ち、弥生時代後期以降、集落の存在していなかった3遺跡に古墳時代中期末頃、突然集落が形成され、様々な消費・生産活動を展開する。しかし、検出できた遺構に重複関係がないことや出土遺物から見て明らかのように、集落は短期間で廃絶する。このような集落の消長は、生駒西麓部に立地する同期の他遺跡でも同様の現象が認められる。

集落は、東から西へ連なる谷筋によって大きく区分されていたものと推定できる。検出できた建物が少数であることから、集落の中心は谷筋を挟んだ北側と南側に想定することができる。

集落内には、欄や溝で区画された掘立柱建物や倉が存在する。堅穴住居や井戸は、まったく確認できていない。

祭祀に関連すると考えられている石製品・木製品・製鉄関連の遺物が出土していることから集落内では、祭祀行為や小規模な鍛冶が行なわれていたことが判明した。また、後述するように谷内から浄水を得るための大規模な水利遺構が検出されていることから、何らかの生産活動ないしは祭祀行為が展開されていたことも推測できる。

先述した出土遺物からみて、3遺跡の居住者の中には、朝鮮半島からの渡来者ないしはこれに極めて強い関係をもつものが含まれていたものとも考えることもできる。

(中西)

## 9. 神並・西ノ辻遺跡の古墳時代水利遺構

水利遺構の位置、層準

東大阪市西石切町1、3丁目で1983年12月から1985年3月までに行なわれた神並遺跡第4次発掘調査、西ノ辻第10・16次発掘調査のたがいに隣接する調査地にまたがって、水受けをもつ桶状木製品や水槽を設置した水汲場、石組で護岸され木管で連結された貯水池列、排水路などから構成される、古墳時代中期末～後期初頭の導水施設跡が検出された(以下、水利遺構とも呼ぶ。ただし、当時の地表付近に復原される装置を指す場合は、単に導水施設と呼ぶ)。本節では、その概要を述べる。

調査地は近鉄東大阪線沿いで、旧国道170

分線の新石切駅東端付近から、東高野街道の東約50mまでの、高架と両側道路部分にあたる(図1)。現地表面の標高は10~19mで、おもに更新統最上部に相当する砂泥互層と砂礫層からなる扇状地緩斜面である。調査地とその周辺の表層には、更新統最上部層を切って(人為的な削平を含む)、層厚1~0.5mのおもに奈良・平安時代から現代までの堆積層が載る。更新統からなる旧地形の凹部には縄文時代から古墳時代までの堆積層が残存する。上述の調査区では、東の生駒山地側から西の低地に延びる埋没開析流路が延長約135mにわたって検出された。この流路は縄文時代中期と晩期の相対的な海水平変動(地盤運動も



図1 神並・西ノ辻遺跡の古墳時代水利遺構が検出された領域

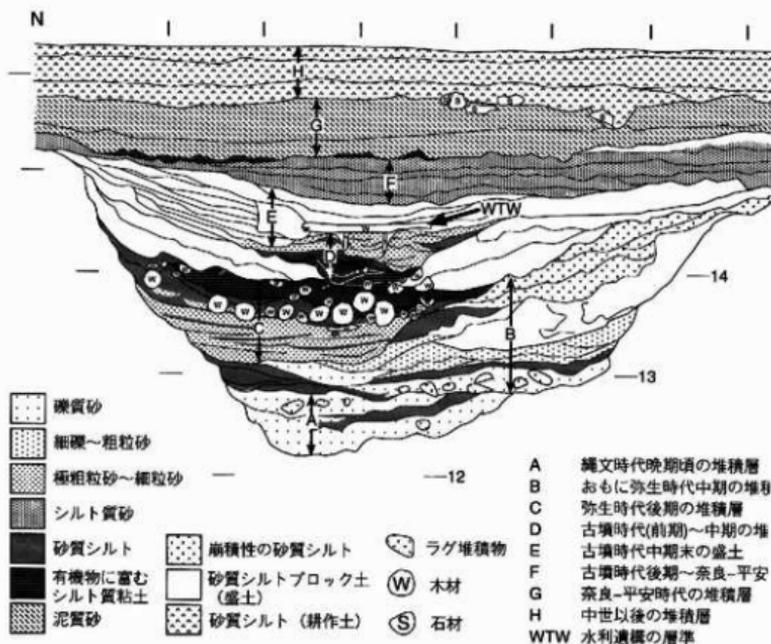


図2 西ノ辻遺跡第10次調査区東端の堆積層断面

考慮する)に起因する基準面低下によって形成された。開析流路の両側壁上端の幅は10~15m、深さは3~4m、流路底は幅2~4mで平坦面をなす。開析流路の堆積層断面の一つを図2に示す(断面位置は図1に示す)。流路充填堆積物は、おもに縄文時代晩期から奈良-平安時代の砂礫層、砂層、砂質泥層などからなり、水利遺構は、この開析流路充填堆積物の黒重の上部にあたる古墳時代後期の層準で検出された。導水施設は、充填のすんだ浅い流路底に築造されており、約100mの区間に連続していた。

#### 水利遺構の構成

導水施設跡は、上流から下流に向かって以

下の遺構で構成されていた。それらの平面配置を図3aに、導水路の縦断面図を図3bに示す。水利遺構が載る谷底の上流端がT.P.約16.5m、下流端がT.P.約11m、勾配は全体で約3.8%で、やや溪流性の河床勾配とみなせる。

#### (1) 槌状木製品 (図3-A地点、図4)

長さ約2m、幅0.4m、厚さ0.2mの厚板に、法面をもつ方形の凹み(水受け)と、そこから下流側に縦断方向に延びる槌状の溝が掘り込まれた木製品が、開析流路内の一連の導水施設の最上流部で検出された。この木製品に接して、横倒しになったり、杭状に短かく立った直径6~8cmの丸太材が、検出されたので、

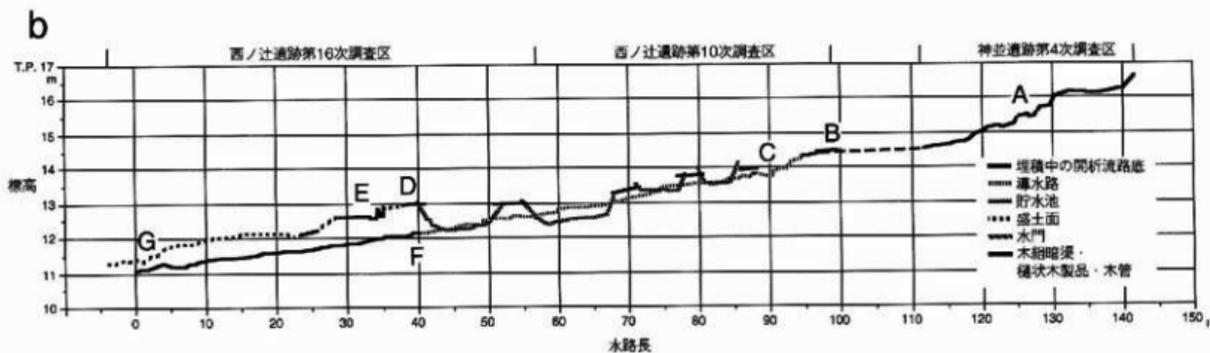
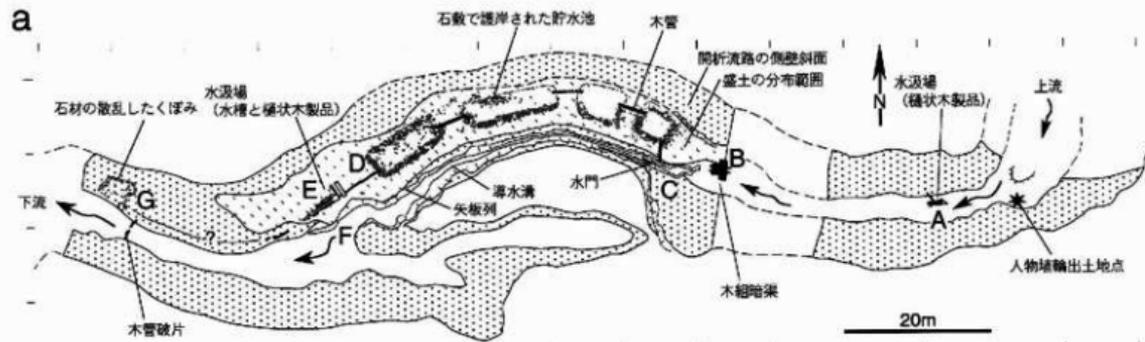


図3 神並・西ノ辻遺跡古墳時代水利遺構の平面配置図(a)とその水路縦断面図(b)

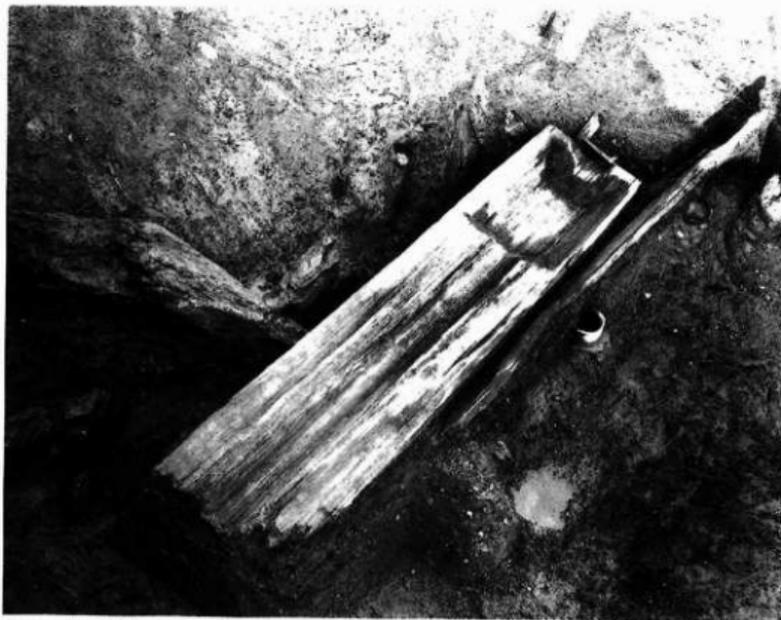


図4 水利遺構最上流部(A地点)に位置する桶状木製品。北東方向に撮影。右上方が上流側。神並遺跡第4次調査区。

これらを支柱とする覆屋があったと考えられる。この桶状木製品の設置された場所は、開析流路側壁の傾斜が強く、木製品周辺の平坦面はかなり狭かったようである。木製品の上流側約5m地点から、下流側約10m地点までの区間は、この木製品の縦断面を含めて、全体にステップ・アンド・プールの流路形状をなす。



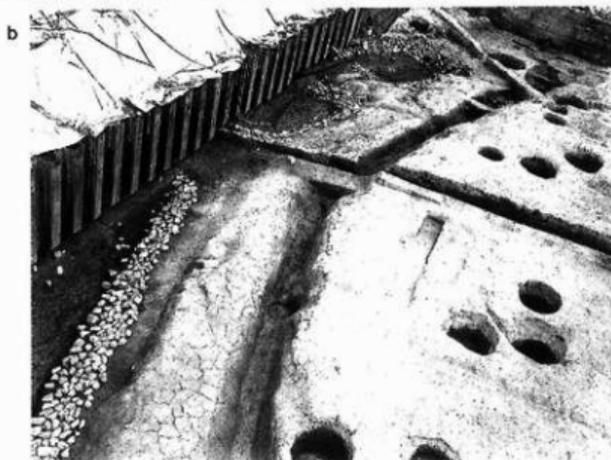
図5 木組暗渠の上面観(B地点)。東から撮影。写真下方が上流側。西ノ辻遺跡第10次調査区。

## (2) 板組暗渠(図3-B地点、図5)

この遺構は、開析流路の谷線に沿って幅約0.7m、深さ約0.6mの溝を掘り、その両側壁を、横位置に立てた板と杭で護岸した後、その上に板や角材を溝に直交して敷つめ、暗渠とした導水施設の跡である。これらの木材にはほぞ孔や受け木の扶りをもつものがあり、建築部材が転用されたと考えられる。暗渠の



a



b

図6 西ノ辻第10次調査区の貯水池列と導水溝。a：上流側のほぼ正方形をなす2基の貯水池（写真中央部）と導水溝（写真左寄り）。写真下方が上流側。北西方向に撮影。導水溝のアゼの間に水門の残骸がみられる（C地点）。b：上流側の2基その下流側の長細い貯水池の一部、および導く水溝。北東方向に撮影。写真上部が上流側。右半に分布する円穴は中世の井戸群。

上には、約0.3～0.7mの厚みで盛土が載り、開析流路を横切る橋、あるいは同時に上流側で溝を堰止めたダムのような施設であった可能性もある。暗渠の閉流路断面積は、上述した築造時の溝よりは小さく、完成直後に埋積された部分を差し引くと、0.5×0.3mほどのもので、後述する貯水池列をつなぐ木管の閉管路断面積より少し大きい程度である。これらは、木導水施設を通過した水の流量を示唆しており、暗渠の清底が洗掘された形跡もないため、築造者が想定していた開析流路の通常の流量も、実際の流量もさほど多くはなかったと思われる。

(3) 導水溝(図3-C～F地点、図6a、b～9)

上述した板組暗渠のすぐ下流左岸側は、暗渠の流路底とほぼ同じレベルの開けた浅い場所が広がり、流路を固定する施設は検出されなかった。しかし暗渠からの流下方向には、不明瞭な溝状の凹みがみとめられ、漸次深さを増してC地点に続く。C地点からは貯水池列に並行して円弧状に延びる溝が続いていた。この仮称「導水溝」は、余剰の流水を水利遺構の下流側に通過させるために設けられたと考えられる。幅1～2.5m、深さ約1.2m、延長約50mで、開析流路の左岸側壁斜面の上部を等高線沿いに、基盤の更新統最上部層を掘



図7 連続する貯水池4基のうち、もっとも下流部にある長細い貯水池。南西方向に撮影。写真左下が上流側。西ノ辻遺跡第16次調査区。貯水池左側に並行して導水溝が見える。また、貯水池の向こう側には水汲場の遺構が小さく見える。



図8 導水溝内にみられた水門の跡と貯水池への取水口(木管の端)。西ノ辻第10次調査区。南西方向に撮影。写真左が上流側。



図9 導水溝下流部の側壁にみられた矢板列。西ノ辻第16次調査区。北東方向に撮影。写真右が上流側。

り込んでいる。

C地点では、貯水池に水を引き込む木管の一端が、右岸側壁の低い位置に設置されていた。このすぐ下流側には、石材が散布し、溝の両岸に渡したり、それに立て掛けたかと思われる状態で2、3の棒材が検出された。このことから、石敷と木組で小規模な水門が設けられており、これを閉じることによって、流水は、上述の木管を通じて貯水池に導かれたと考えられる(図8)。

導水溝は、下流に向かって幅を拡げ、F地点の手前では屈曲している。屈曲した部分の上流側7mほどの区間の側壁には護岸のための矢板列が残存していた(図9)。F地点から

約10m下流側まで、導水路内を運搬され、排出された砂礫が分布していた。流路勾配はほとんど変化しないが、流路幅が急に拡がり、流速が減少して、ここに堆積したと考えられる。

#### (4) 貯水池列 (岡3-C-D地点、岡6 a, b, 7)

C地点の水門を閉じることによって、流水は同地点側壁に埋め込まれた木管に流入し、開析流路に沿って築造された貯水池列に導かれる。貯水池列は、約45mの区間に4基あり、上流2基は開析流路内の谷線に沿って設置され、下流側に向かって流路右岸の流路縁にされてゆく配置をなす。これらは、上流側2基

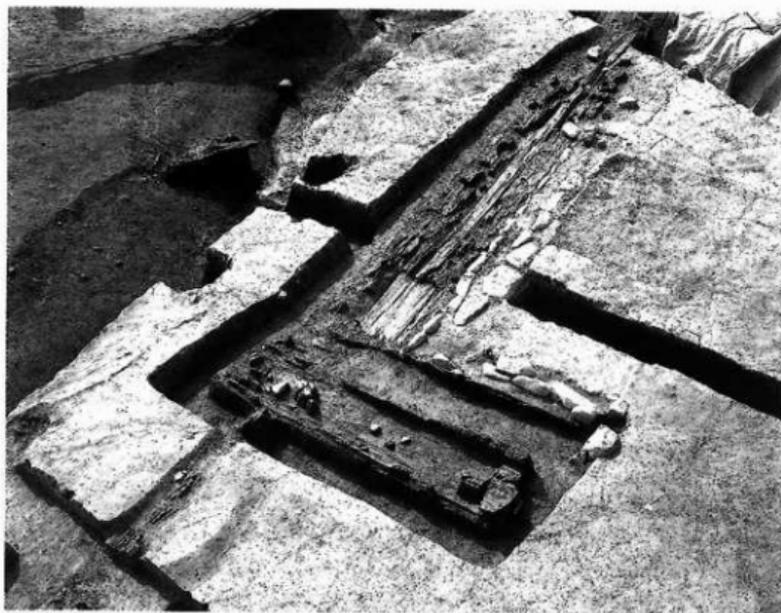


図10 水汲場(E地点)の水槽(手前)、桶状木製品、石敷。西ノ辻第16次調査区。南西方向に撮影。左下が上流側。

は、側壁上端で掘った一辺が5～6mの正方形に近い平面形をなし、下流側の2基は幅約5m、縦断方向の長さ約13mの長方形をなす。貯水池の深さは0.5～0.8mであった。すべての貯水池の側壁は傾斜約30°の法面をなし、石敷で護岸されていた。貯水池底には石敷はなかった。石材は近隣の河床から採集されたと考えられるハンレイ岩と少数の花コウ岩で、細粒の巨礫から細粒の大礫(512～64mm)クラスの粒径であった。4基の貯水池は、側壁のやや高い位置に埋め込まれた木管によって直列に連結されていた。また、貯水池列最下流端のD地点からは次に述べる水汲場に木管が延びていた。木管は、丸太材を半裁し、芯部を削り貫いて割竹状にした後、一方を桶

状に設置し、他方をそれに被せて再び円筒形に組み合わせたものであった。被さる方の部材がわずかに短く、木棺端部が受け口状になるものがあつた。外径は20～25cm、厚みは3～4cmで、長さは3.5～5m。最上流側の貯水池の排水口にあたる木管の端部には、直径より一回り長い、幅8cmの板材がはりついて検出され、貯水池列の中途でも流量が制御されていたと考えられる。また、最下流の貯水池に上流から連結された木管の出口周辺には、3本の丸太材が散らばっていたので、ここに支柱をもつ装置があつたと思われる。

水路の縦断面でみると、上流側2基の小型の貯水池と下流側2基の大型貯水池のはそれぞれ同じ程度の高度に設置されており、2基

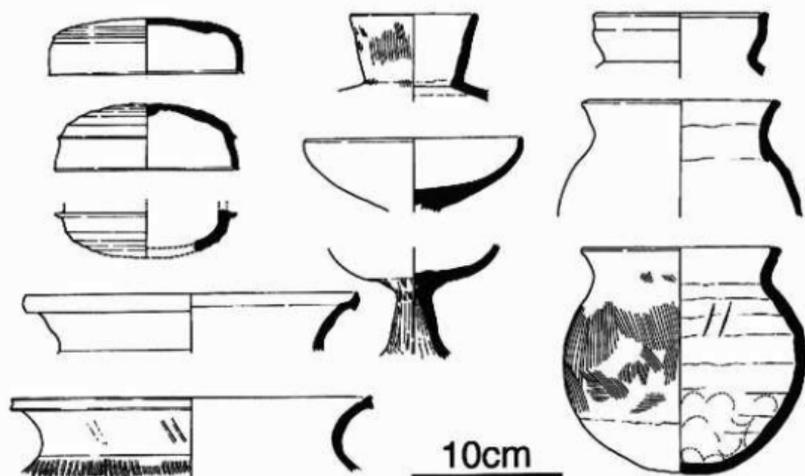


図11 西ノ辻第10次調査区の水利遺構にともなう遺物。左列上より、須恵器杯の蓋、杯の身、甕。中列上より土師器壺、高杯。右列、土師器甕。

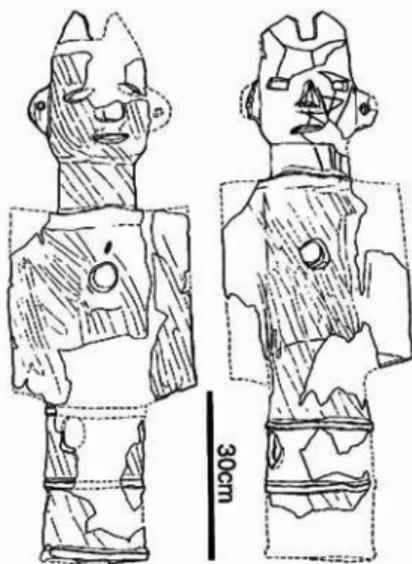


図12 盾持人物埴輪。水利遺構上流端より約10m上流で、破碎された状態で出土した。

めと3基めの導水勾配が強い(ただしこの連結部は調査区域外で推定による)。上流側の板組暗渠や、下流側の水汲場より下流でみつかった木管との比高とも考え合わせると、この一連の導・貯水施設は、2、3の緩やかな段差を意識して築造されていることがわかる。また、貯水池に連結された木管の位置は高く、水面近くで注ぎ込み、底から排水するのではなく、水面付近から排出するという造作は、上澄みの水を得ようとしたことの表れと考えられる。その意味では、貯水池ではなく沈澱池ということになる。なお、最上流側の1基めの貯水池では、最初に検出した護岸の石組の下に、より古い石敷が一部に残っていた。築造中のプランの変更か、補修であろう。

(5) 水槽と桶状木製品 (図3-E地点、図10)

貯水池列の下流端D地点からは、2本の木管が約5.5m連結され続いていた。その下流側には、長さ2.2m、幅0.6m、深さ0.2mあるいはそれ以上の、一木を削りぬいて作られた水槽が、流路の縦断方向に直交して埋め込まれていた。これとカギ形をなすように下流側には、約30cmの間隔をおき、その間を短い桶でつないで、長さ4.5mの桶状木製品が、流路の縦断方向に設置されていた(図10)。これらの残存状態は悪く、多くの部分が腐朽していた。流下方向の右側にあたる桶状木製品の木口端に接し、水槽の側壁と平行して一枚の板が横位置に立てられていた。この板と桶状木製品の流下方向右側の縁辺に接して、足場を固めるための石敷がカギ形をなすように施されていた。

上述の水槽と桶状木製品を組み合わせた施設を囲むかたちで柱穴、柱根が検出され、1×7間(そのうち1間は間隔が小さい)約8×4mの覆屋があったことがわかった。これらの施設を「水汲場」と仮称する。地表の施設を一回り大きな範囲で覆う程の広さである。桶状木製品の downstream にはさらに1本の木管が連結されていた(長さ不明)。柱跡の位置からみて、覆屋はこの木管の一部も覆っていたと考えられる。木管の下流側には、浅い溝状の凹みにわずかな木片が検出され、さらに木管が延びていたことが知られた。また、この痕跡の両側には、約70cm間隔で木管を挟むように立てられた柱根・柱穴が、2対、約3mの間隔をおいて検出され、この木管を覆う構造か、あるいは他の支柱を伴う施設があったことがわかる。水汲場とその周辺では、異なる層相

の盛土がいくつかの分布範囲をなし、薄く重なり合うところもあり、入念な整地が行なわれたように思われる。

(6) より下流側の導・貯水施設の痕跡 (図3-E~G地点)

上述の水汲場(E地点)より下流側では、明瞭な遺構を検出できなかったが、流路右岸の緩やかな流路側壁斜面には、さらに10m下流側まで盛土の分布がみとめられたほか、E地点の桶状木製品の downstream 端から約7m下流側では、木管の破片が、原位置を保っていると考えられる状態で検出された。さらに下流側の調査地西端付近(G地点)では、右岸の斜面に、おおむね隔九方形の浅い凹みがみとめられ、大雑クラスの礫が散布していた。また、その2m上流側の流路底には、木管の破片らしき材がみつかった。同様な材は、旧国道170号線をはさんだ西側の西ノ辻第20次発掘調査地東端で検出された開析流路内でもみつかった。これらのことから、導・貯水施設は、少なくともG地点まで延びていたと考えられる。

(7) 築造時の排水溝

水利遺構の築造過程では、当然のことながら、通常流下する河川水で築造中の貯水池が浸水しないように、まずC~F地点間の導水溝が掘削されたと考えられる。それでは、掘削中の導水溝が浸水しないために、築造者はどうしたのか。すべての石組と盛土を除去すると、図がしていないが、C地点から貯水池列とほぼ重複して延び、F地点に達する溝がみつかった。幅約1m、深さ約70cm。この溝で河川水を通過させ、上述の導水溝を掘削したと考えられる。貯水池築造時には、排水溝

のうち、少なくとも貯水池で凹む場所以外は埋め戻された。

#### 水利遺構にともなう遺物

本水利遺構にともなう、5世紀後半の須恵器の壺、坏、有蓋高杯、甕、土師器の壺、高杯などが出土した。その一部を図11に示す。数量は未確認であるが、貯水池内では、他の場所に比べて高杯の出土量が多いようである。また、上述した遺構群の上流端A地点のさらの10m上流側の流路底では、5世紀末のものと考えられる盾形人物埴輪が2個体、破碎された状態で出土した。その復原図を図12に示す。また、近傍のはほぼ同一層準では、木口に装飾的な鋸歯形の削り込みを施したり、刀形に仕上げた板材が出土した。

#### 導水施設の埋没・破壊

以上に述べた、古墳時代中期末の水利遺構の廃絶過程について考える。一連の貯水池とこれらにつながる木管、植木製品はおもに有機物に富む砂質泥で充填されていた。これらに並行する導水溝はおもに細礫以細の砂礫で充填されていた。このことから、導・貯水施設は一定の使用期間の後、構造をおおむね保ったまま放置され、施設の凹部と孔隙部分が上流からの土砂で充填されたと考えられる。しかし、この遺構が検出された層準の最上部では、貯水池の石材はかなり散乱し、水汲場を構成したはずの柱やその他の部材には欠損が顕著であった。D地点より下流側では、遺構上部が削平された印象を受ける。遺構は、A地点ではシルト質砂礫層に、より下流側の遺構群は、さらに細粒の砂質シルト層ないしシルト質砂層で広く覆われていた。これらは

古墳時代後期に堆積した。開折流路内でのこれらの運搬営力で、上述のような遺構の擾乱が生じるとは考えられない。したがって、遺構群は構造を保ったまま放置された後、破壊されたと思われる。

#### 導水施設の意味

導水施設は、開折谷を流下する河川水と、谷底下の伏流水によったと考えられる。貯水池をつなぐ木棺は貯水池の底ではなく、満水時の水面より2~30cm低い位置に設置されていた。高い位置で給水し、高い位置から排水する。したがって、貯水池はつねに一定の水を貯留するが、揚水装置を利用しない限り、そのすべてを利用できない。むしろ、これらはおもに懸濁・浮遊物質を除去する沈殿池として機能していたと考えられる。掃流れ物質はC地点でおおむね除去されたであろう。上流側2基が小さく、下流側2基が大きいのは、より細粒で沈降が遅い懸濁物質にたいして、より長い滞留区間を設けるという点で合理的である。実質的に利用される貯水量は、木棺底より高い部分の容積に相当する。施設を通過する流れは、上流側C地点での堰き止めと、木棺の端部の開閉によってさまざまな制御が可能である。それによって、ある地点を通過する単位時間あたりの流量と、一定期間に利用される水の総量には、さまざまなバリエーションが可能となる。それらを具体的に解明するには、より詳細な水理学的検討が必要と思われる。水汲場の開水路における満水流量がその基準の一つになる。

水汲場の覆屋は、地上の導水装置を覆う程度の広さであり、水を汲む、小物を洗うなどといった活動以外の、たとえば、通常の居住

空間としては狭い。樋状木製品の溝の滴水流量や勾配、さらに下流側に貯水池があることなどを考えると、汚物・排泄物を洗い流したとは思えない。

埴輪や高杯の類出から、この導・貯水施設にともなって何らかの祭祀行為がなされたと考えられる。しかし、現代の家屋で仏壇や神棚を拝むように、施設の一部に限られた祭祀が行なわれたのか、神殿のように装置全体が、こまごました祭祀行為を統合する祭祀場であったのかは不明である。また日々の食事から、時代を画する政治的決定に至るまで、祭祀が社会と不可分であったことを前提とすれば、行為者のふるまいとその象徴的意味からなる祭祀過程が復原・説明されえない限り、祭祀は空語に等しい。ただ、本施設の構築直前から埋没までの過程をより詳細に検討することによって、遺構の扱われ方に関する状況証拠を得ることはできる。

(松州)

## 10. 神並・西ノ辻遺跡の遺構と遺物



▲羽釜棺墓検出状況（神並遺跡）



▲棺に転用された羽釜と皿（神並遺跡）



▲川から出土した甕・杯・皿・高杯  
（西ノ辻遺跡）

### 飛鳥時代

この時代の遺構は、神並遺跡で羽釜棺墓が1基だけ知られている。出土地は、石切神社の南から北に通じる参道より少し東である。建物など居住域を直接示す遺構は確認されていない。

西ノ辻遺跡では遺構が発見されていないが、向遺跡の境にあたる東端付近を流れていた河川の中や包含層中より土器がかなり出土している。付近に集落が存在したことは間違いない。

おそらく法通寺（現在の石切神社付近にあった飛鳥時代末期から空町時代の寺院跡）の存在や、前代の古墳時代集落と次の奈良・平安時代の集落の立地から推定すると神並遺跡の今回調査した地点の北側に存在したものと考えられる。実態の解明は今後の課題である。

羽釜棺は飛鳥時代末期（7世紀末～8世紀初め）に、日常煮沸に使用していた土器と食器の皿を転用して組み合わせて棺としたもので、地面に穴を掘って葬っていた。羽釜は在地産で、皿は他地域で作られたものである。この種の羽釜は中南河内地方以外では、祭祀に用いられることが多くセットとして製作された竈とともに都をはじめとする各地にもたらされている。

遺物は当時、食器として用いられた須恵器の杯や高杯、土師器の碗や高杯と煮炊きに使われた土師器の甕、羽釜や貯蔵に使われた須恵器の甕など出土している。（福永）



▲字が書かれた墨書土器(神並遺跡)



▲須恵器、円面硯(西ノ辻遺跡)



▲井戸から出土した土師器・須恵器(神並遺跡)



▲製塩土器(西ノ辻遺跡)

#### 奈良時代の神並・西ノ辻遺跡

掘立柱建物や倉庫、井戸などが石切神社に南から入る参道のやや西、東西70m南北25mの狭い範囲で検出されている。西ノ辻遺跡との間に流れる川の北岸にあたる場所で、井戸は川岸近くに作られていた。

掘立柱の柱穴は中世とは異なり1辺約80cm前後の堀方をもつ平面形が隅丸方形をした大きなものが見られこの時代の建物の特徴を示している。柱は残っていないが、痕跡から径20cm程度のものが使用されていたと推定される。6棟が確認され内2棟は廂が存在したようである。大きな建物で約18㎡の広さがある。倉庫は束柱を持つ建物で面積15㎡と7.7㎡の2棟が検出されている。建物は主軸の方位が異なり2時期にわたって存在したようである。

井戸は平面が1辺2.7mの隅丸方形、深さ3.2m以上の穴を掘りその中央にはほぼ正方形に板を組んで1辺90cmの井筒としたものである。井戸枠に用いられた板の1枚に「南」と墨書されたものがある。井戸内からは、奈良時代後期の須恵器・土師器などが出土中には「長福」「池」と墨書されたものも見られる。集落は、調査地の北に広がるものと考えられる。

墓は、前代の羽笠棺と隣接した位置から1基同様の棺が検出されている。

西の辻遺跡では、奈良時代中頃に流れていた川から小型の土師器甕・甗・ミニチュアの高杯・穴のあけられた小型の壺・須恵器壺・四座の小型海獣葡萄苺鏡・木製の人形などの祭祀遺物がまとめて出土した。包含層からは土馬も出土している。甕・甗は川の北岸から投げ込まれており、周囲には小型の甕が



散乱していた。出土地は西流してきた川が、北西に蛇行する地点で、川の中に水流を調節するために幅約5mの範囲に杭を多数打ち込んだ出口付近である。

この祭りを行ったのは、位置から見て東に隣接する神並遺跡にすんだ人々と考えられる。村外れの川岸で都と同様の律令国家が定めた祭の方式を忠実に守り祭を行ったのであろう。これは、いたことを示している。また、海辺から塩を入れる容器としてもたらされた製塩土器や須恵器の円面硯なども出土している。  
(福永)



▲国産小形海獣葡萄鏡(西ノ辻遺跡)



▲祭りに使われた木製人形(西ノ辻遺跡)



▲土馬(西ノ辻遺跡)



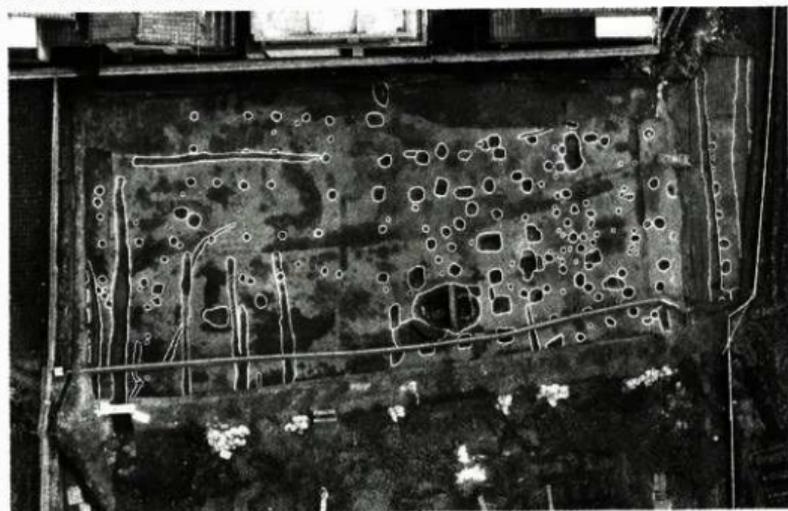
▲河辺の祭りで使われた土器(西ノ辻遺跡)



▲掘立柱建物検出状況(神並遺跡)



▲柱穴根石検出状況(神並遺跡)



▲平安時代集落跡検出状況(神並遺跡)

#### 平安時代前期・中期の神並・西ノ辻遺跡

この時代の集落跡は、神並遺跡で奈良時代の掘立柱建物のすぐ西に隣接して検出されている。遺構は掘立柱建物・溝・櫓などである。掘立柱建物は前期（9世紀）が3棟（床面積18.9㎡、16㎡他）で内2棟は総柱の倉庫と考えられる。中期（10世紀前半）は1棟（床面積34.7㎡）で円形の柱穴をもち中には根石をもつものがある。溝は、畑作に伴うもので櫓は建物の敷地を区画するために設けられたと考えられている。

今まで調査が行われた地は、前代同様に当時の集落の西南にあたる地で、中心は北に広がると考えられる。10世紀後半以降11世紀前半までの遺構は検出していないので奈良時代に居住を開始しこの時期に、居住地を替えたようである。南に隣接する鬼塚遺跡でも最近、9世紀半ばに居住地を替えている。

西ノ辻遺跡では、旧170号線のすぐ西側で

溝が1条検出されている。清内からは、灰釉陶器・緑釉陶器・土師器・須恵器・黒色土器のほか「大瀧」「知」と墨書された土師器も出土しているが、神並遺跡と一連の集落と考えられる。

神並遺跡の南を流れる川からは、大阪府下では珍しい中国製の越州窯青磁の鉢や、富寿神宝などの皇朝十二銭の数種類が出土している。

神並・西ノ辻遺跡で検出された奈良時代からこの時代までの建物跡は、出土遺物の種類に多様さと位置関係から見て石切神社の社域に存在する飛鳥時代（7世紀後半）の創建された法通寺に関係した富裕層の住む集落と考えることができる。同寺所用の瓦が遺構や包含層から出土していることもこれを裏付けている。

(福永)



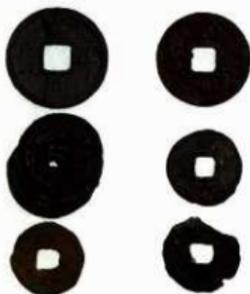
▲当時の日常雑器、土師器・黒色土器  
(西ノ辻遺跡)



▲国産緑釉陶器・越州窯青磁  
(神並遺跡)



▲字の書かれた墨書土器(西ノ辻遺跡)



▲平安時代の皇朝十二銭(神並・西ノ辻遺跡)

#### 平安時代後期の神並・西ノ辻遺跡

この時代の遺構は、井戸、土塼、ピットが発見されている。集落を構成する建物の復元は困難であるが、遺構の分布から見て、現在の新石切駅東端を中心に集落が営まれていたものと考えられる。井戸には方形の算木を組んで木製の井戸枠を作ったものがある。方形の木枠を備えた井戸は奈良時代から平安時代前半によく見られ、平安時代後半には素掘りの井戸が多くなるので、この井戸は、この時代としては丁寧に作られた立派な井戸といえる。井戸の底の水溜めとなる部分には曲物枠の側板を据えているものが多い。



▲曲物井戸検出状況(西ノ辻遺跡)



曲物井戸の底部(西ノ辻遺跡) ▶



▲算木を組んだ井戸(西ノ辻遺跡)

この時代の食器の組み合わせは、黑色土器に変わって新たに登場した瓦器碗と、大小2つの大きさの土師器皿を基本とする単純なものである。

ここで成立した基本的な食器の組み合わせは、南北朝時代まで続く。これに、中国製の白磁碗、瓦器小皿などが加わる。瓦器碗は極めて細い粘土で薄手に作られ、口縁部に沈線が巡らされた大和産とやや粗い粘土で作られた河内産の両方が用いられているが、大和産のものが8～9割以上と圧倒的に多い。土師器皿には、口縁部を外側に折り曲げた後、上方につまみ上げる独特の器形の小皿をはじめ京都の土師器皿の形をまねたものが多い。中には京都で作られたと思われるものもあるが、ほとんどは河内産である。煮炊に用いられる土器は、土師器羽釜である。羽釜には鈔が付いているが、竈にかけるのではなく、五徳に載せて鍋のように使用する。土師器の羽釜にも大和産と河内産のものがあり、瓦器碗と同様に、大和産のものが多い。調理用の鉢は、東播磨の神出窯（神戸市）で生産された須恵器鉢が、貯蔵用の甕や甕は神出窯産の須恵器のほか、この時代の終わりには常滑・瀬美窯産の陶器がもたらされるようになる。このように、日常使用する土器類は河内、大和といった近郊ばかりでなく、播磨（兵庫県）、尾張、三河（愛知県）などの遠方からもたらされているのである。（森島）



▲瓦器碗、小皿・土師器大、小皿(西ノ辻遺跡)



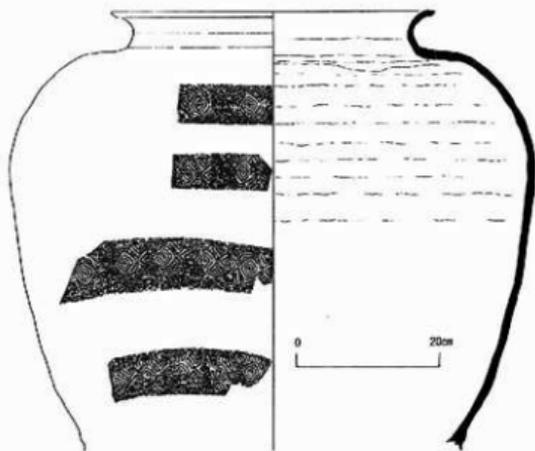
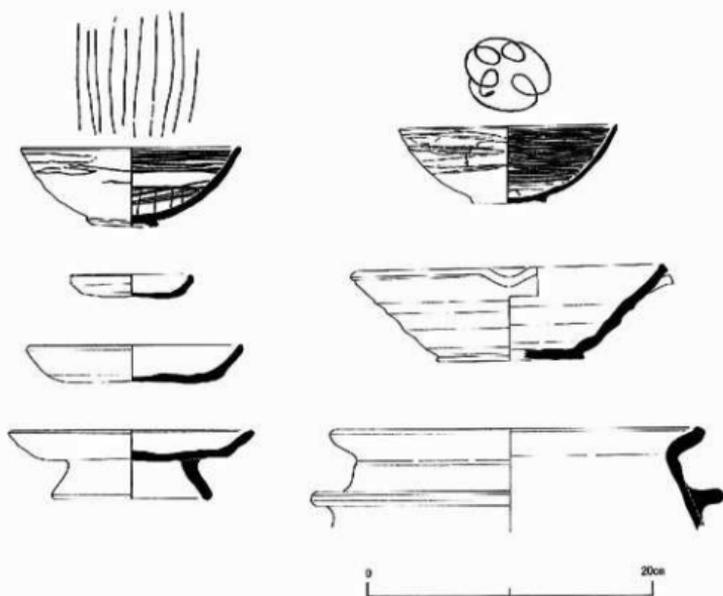
▲東播系須恵器捏鉢(西ノ辻遺跡)



▲土師器羽釜(大和型)(西ノ辻遺跡)



▲常滑焼甕(西ノ辻遺跡)



▲瓦器椀・土師器大、小皿、台付皿・釜・東播系須惠器控鉢・常滑焼壺実湖国(西ノ辻遺跡)

### 鎌倉時代の神並・西ノ辻遺跡

この時代の遺構は神並・西ノ辻遺跡のほぼ全域にわたって広がっており、平安時代後期と比べて集落が拡大していることがわかる。主な遺構には、柱穴、井戸、土塼、墓などがある。

この時代の西ノ辻遺跡の村は南東から北西に流れる川の北と市の両方で発見されている。川には堰を設けて治水が行われていた。川を埋めた土の中からは多量の土器、木製品などのほか、馬、牛、犬などの動物の骨が多量に見つかる。特に馬の骨が多く、何頭分もがまとまって見つかることもある。このように、川は耕作に必要な水を得る他に、廃棄物の処理場でもあった。

この時代の建物は簡単な独立柱建物である。柱穴が集中して見つかる場所があり、建物が何度も建替えられたことがわかるが、柱穴の数が多すぎて建物の形を復元することはできない。柱穴の多くは直径30cm足らずの円形で、中には柱根の残っているものや、柱穴の底に礎石を据えたものもある。



▲井戸・独立柱建物検出状況(神並遺跡)



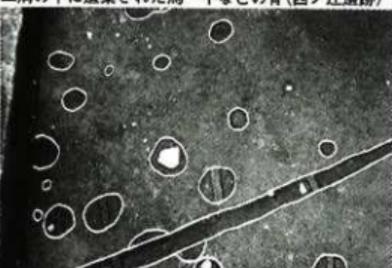
▲堰検出状況(西ノ辻遺跡)



▲溝の中に遺棄された馬・牛などの骨(西ノ辻遺跡)



▲礎石検出状況(西ノ辻遺跡)



▲瓦器検出土状況(西ノ辻遺跡)

井戸は井戸枠を用いない素掘りの井戸である。これは、市内の平野部で発見されるこの時代の井戸の多くが、底の抜けた羽釜を積み重ねて井戸枠に転用したものであることと対照的である。沖積平野に比べてしっかりしている山麓の地盤を反映したものであろう。井戸を埋めた土の中からは遺物が多量に出土することがある。ときに、完形品を含む瓦器類を多量に投棄していることがあり、井戸を埋めるときに行うお祭りに関係するものかもしれない。また、井戸の底では木製品が腐らずに残っていることが多い。



▲井戸検出状況(神並遺跡)



▲土器検出状況(神並遺跡)



▲井戸断割り状況(西ノ辻遺跡)

西ノ辻遺跡で発見されているこの時代の墓は、全て土葬墓であり、いずれも北枕で埋葬されている。墓は特定の場所に集中するのではなく、集落内のあちこちに点在していることから、屋敷地内に営まれる屋敷墓であると考えられている。現在の新石切駅西端では東西に並んだ2基の上葬墓（木棺墓）が発見された。2基とも骨がよく残っていたので、北枕で埋葬されたこと、東側が40代の男性、西側が40代の女性であることなどがわかった。男性の方は土師器大皿1、土師器小皿6が女性の方は中円製の青磁椀1、土師器大皿1、土師器小皿4が、副葬されていた。副葬品から見て、男性が先に埋葬されており、女性が埋葬されたのは、少なくとも20～30年後であると考えられるが、隣りあって埋葬された2人は、近しい親族なのだろう。



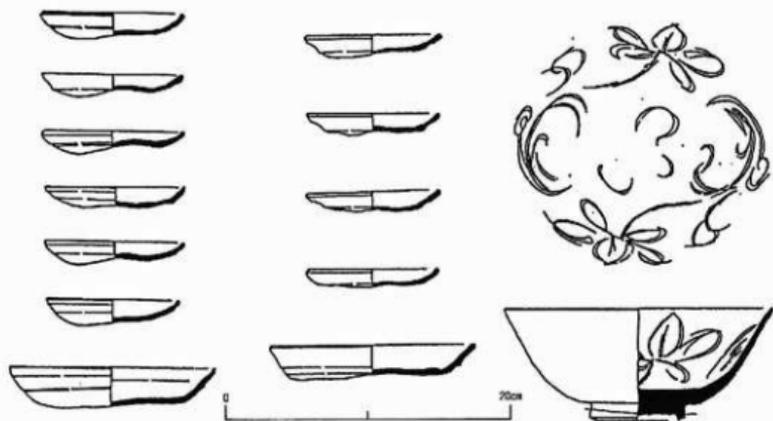
▲木棺墓副葬土器(西ノ辻遺跡)



▲木棺墓副葬青磁椀・土師器皿(西ノ辻遺跡)



▲土墳墓検出状況



▲土墳墓副葬品実測図(西ノ辻遺跡)

この時代の食器は、平安時代後期以来の瓦器碗と大小の土師器皿の基本セットであるが、瓦器碗はこの時代を通じて急激に小さくなり、容量は1/3に縮小してしまう。瓦器碗の生産地別では大和産が全体の6割～7割前後であり、その割合は前代より減っているものの、依然として河内産よりも多くを占めている。しかしながら、この時代の末には河内産のもの割合が急激にふえ、約9割を占めるようになる。中国製品は青磁碗が輸入され、名主などの有力者層に使われた。煮炊具は土師器羽釜の他に、この時代の後半には瓦質の三足羽釜が現われる。三足羽釜は平安京や淀川流域の地方では平安時代末から見られるが、この地域ではほぼ、鎌倉時代後半に限ってみられるといっている。口縁部に段をもつ瓦質羽釜も同じ頃に現れるが、量が多くなるのは次の南北朝時代を待たなければならない。

壺、壺、鉢は、前代に引き続いて東播磨や東海産のものもたらされている。



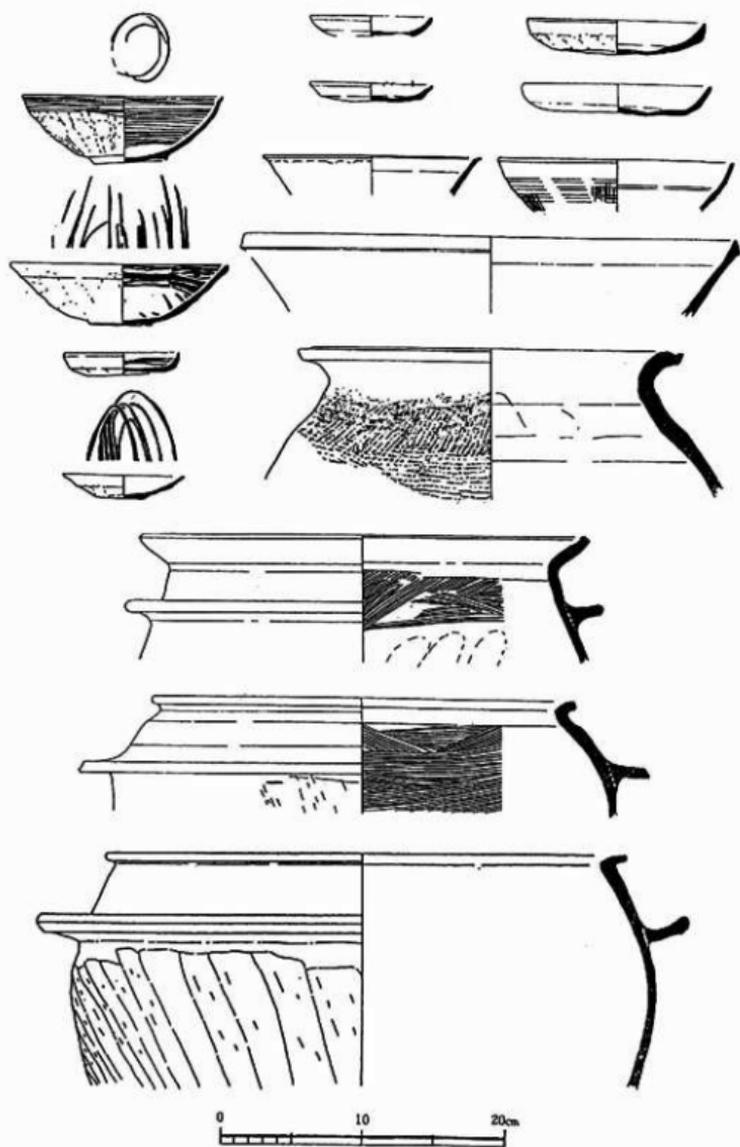
▲大和型瓦器碗、皿・土師器大、小皿(西ノ辻遺跡)



▲和泉型瓦器碗・土師器皿(西ノ辻遺跡)



▲東播系捏鉢(神並・西ノ辻遺跡)



▲瓦器椀、皿・土師器大、小皿・土釜・東播系捏鉢、窠突測図(神並・西ノ辻遺跡)



▲土師器羽釜(西ノ辻遺跡)



▲瓦器三足羽釜(西ノ辻遺跡)



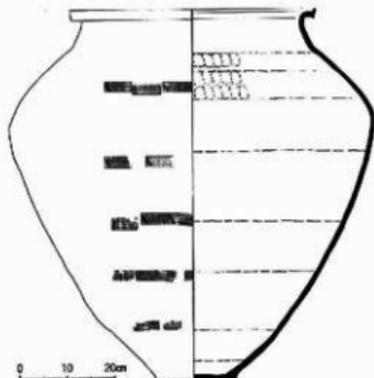
▲土師器大、小皿(西ノ辻遺跡)



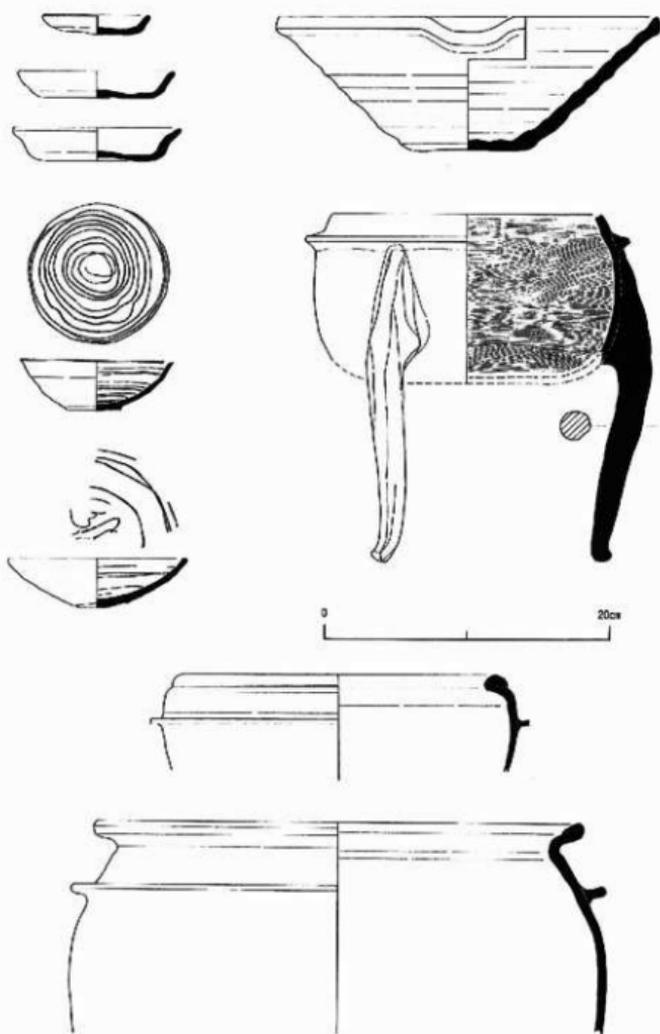
▲大和型瓦器椀(西ノ辻遺跡)



▲備前焼小壺・瓦器甕(神並・西ノ辻遺跡)



▲常滑焼甕実測図(神並遺跡)



▲土師器大、小皿・大和型、和泉型瓦器椀・東播系捏鉢・大和型、和泉型土師器羽釜実測図  
 (神並・西ノ辻遺跡)

今回の調査では木製品が多量に出土したことも大きな成果であった。西ノ辻遺跡からは、この時代の下駄、釣瓶、曲物桶、鎌、ホッケーのような遊びに使われる木球、俵や筥を纏むときに使用する蓑桁やつちのこなどが見つかった。これらの多くは、農村では近年まで日常的に使われていたものほとんど同じ形をしており、私たちの生活用具がこの数十年の間に著しく変化したことを実感させるものであった。西ノ辻遺跡の鎌倉時代の井戸から出土した木筒には「蘇民将来子孫宅也」と墨で書いてあった。これは、疫病よけのまじないとして広く行われていたもので、現在でも祇園祭のお札などに残っている。

西ノ辻遺跡では中世の耕作溝が見つかるが、村の人々は農業のほかに、漁労活動も行っていた。漁網の錘に使用する土錘はさまざまな大きさのものが出土するが、最も多量に見つかるのは長さ3cm位の紡錘形のもので、投げ網に用いられたのではないかと思われる。(森島)

- 1 釣瓶(西ノ辻遺跡)
- 2 下駄(西ノ辻遺跡)
- 3 呪符木簡(鬼虎川遺跡)
- 4 鎌(西ノ辻遺跡)



▲絵図に見られるざっちょう



1



2



3



4



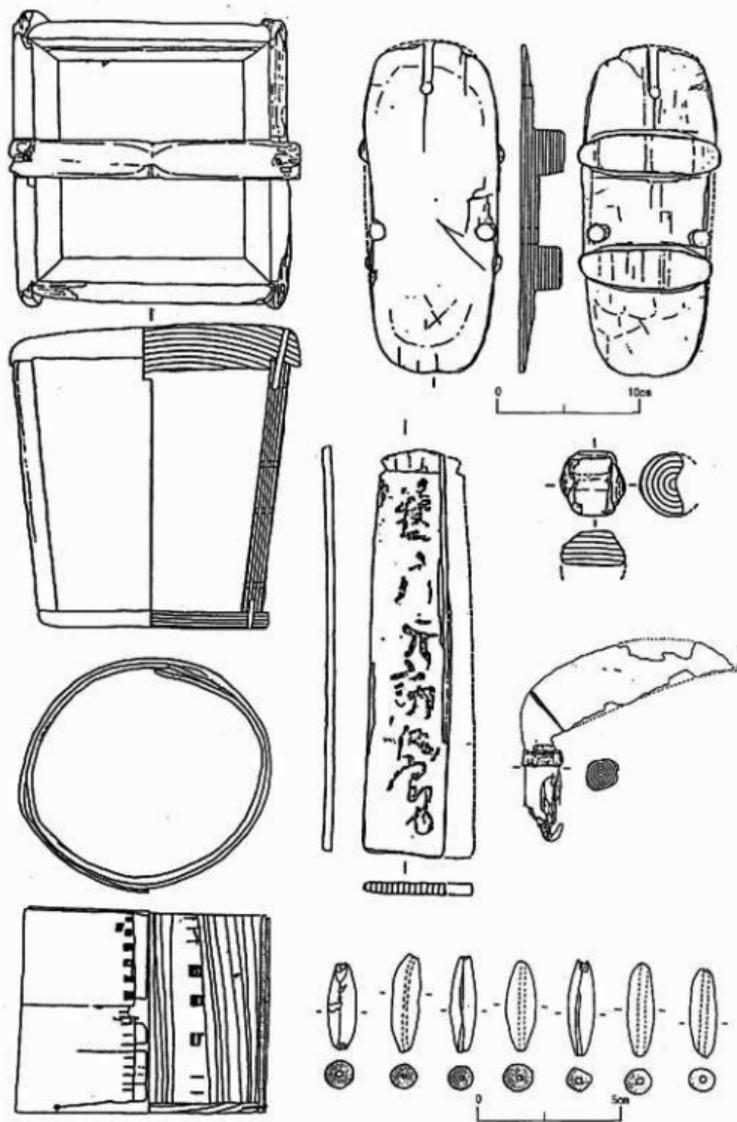
5



6

5 木球(西ノ辻遺跡)

6 土錘(西ノ辻遺跡)



▲釣瓶・下駄・曲物・木球・呪符木簡・鎌・土錘実測図(西ノ辻遺跡)

### 南北朝時代の神並・西ノ辻遺跡

南北朝時代になると鎌倉時代より遺構の数は少なくなる。この時代の遺構には井戸、土塼、溝などがある。

この時代は平安時代後期以来続いてきた食器の基本セットに変化が見られる時期である。瓦器碗は容量をさらに縮小し、出土量も減少して、この時代のうちに消滅する。このことは漆器碗の出土量が増えることと関係しているように思われる。土師器皿は底が上に突き出した「ヘソ皿」と呼ばれるものが見られる。煮炊具は瓦質羽釜が多くなり、河内産の土師器羽釜はない。大和産の土師器羽釜は依然として使われているが、機能を失った鋳は凸帯状に退化し、やがて消滅して名実ともに鍋になってしまう。平安時代以来使われてきた東播磨産の須恵器鉢も生産されなくなり、大和産と和泉産の瓦質搦鉢がこれにかわる。大和からは外面に菊花のスタンプ模様を押した火鉢ももたらされている。これは奈良火鉢として全国的に流通していたものである。木製品では曲物桶の他に結桶が使われるようになっている。珍しい遺物としては古代以来まじにに使われてきた人形が発見されている。

(森島)



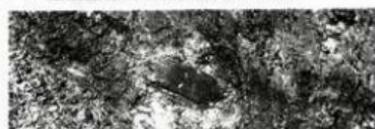
▲土師器・瓦器羽釜（西ノ辻遺跡）



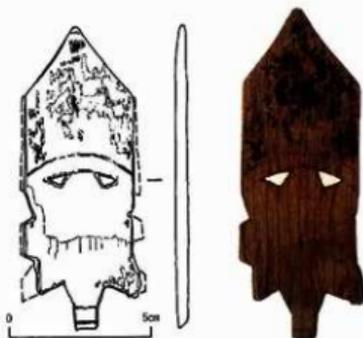
▲ 井戸検出状況（西ノ辻遺跡）



▲ 土壙遺物出土状況（鬼鹿川遺跡）



▲ 人形出土状況（西ノ辻遺跡）



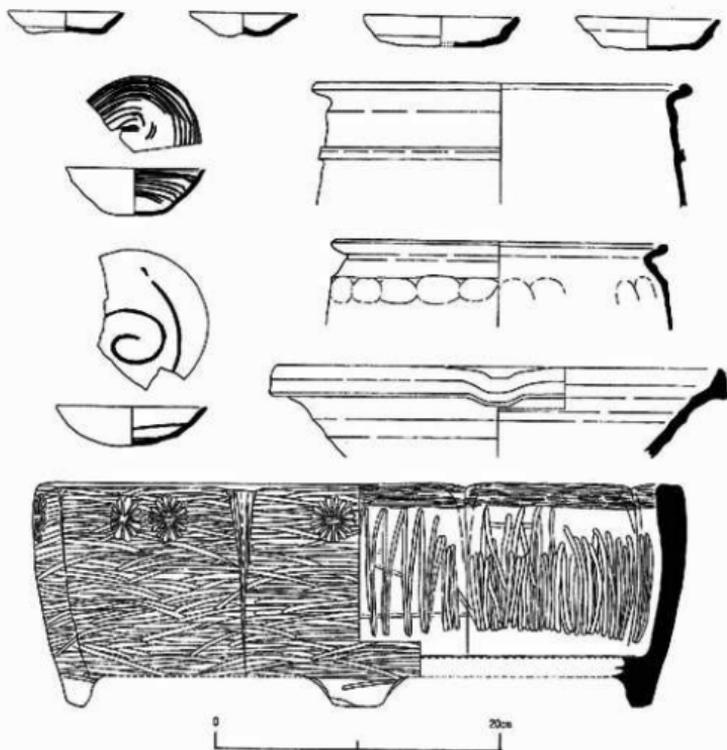
▲ 人形実測図・写真（西ノ辻遺跡）



▲井戸出土瓦器火舎、椀・土師器大、小皿  
(西ノ辻遺跡)



▲東播系捏鉢 (西ノ辻遺跡)



▲井戸出土瓦器火舎、椀・土師器大、小皿、羽釜・糠播系捏鉢実測図 (西ノ辻遺跡)

#### 空町時代の神並・西ノ辻遺跡

神並遺跡ではこの時代の遺物は河川跡からは出土しているが、遺構として明確なものは検出していない。耕作地となったと考えられる。

西ノ辻遺跡からは掘立柱建物や井戸などが検出されているが、集落の中心は西側に移り鬼虎川遺跡の範囲に及んでいる。この時代の遺構は鬼虎川遺跡で検出された16世紀中頃の井戸を最後に無くなる。その後の居住地は、おそらく現在の旧村部に移り跡は、田畑に変化したようである。

日常雑器は、前代と変わらないが搦鉢や火舎（火鉢）など碗・皿以外にも瓦器の製品が増える。搦鉢は、陶器の備前焼や信楽焼は高価なためか数が少なく形を写した瓦器（大和型を主体に和泉型も存在）が多く出土している。また、喫茶の風習が伝わりお茶用の瀬戸・美濃産天目茶碗が見られる。（福永）



▲土師器大、小皿・瀬戸美濃産天目茶碗（鬼虎川遺跡）



▲土師器・瓦器羽釜（西ノ辻遺跡）



▲掘立柱建物検出状況（西ノ辻遺跡）



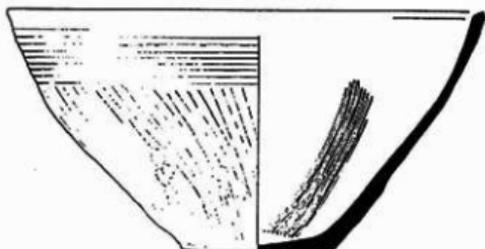
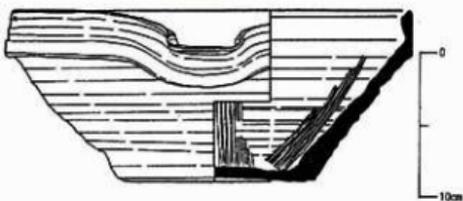
1



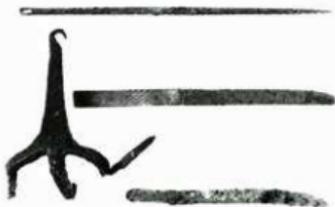
2



3



4 備前焼摺鉢・瓦器摺鉢実測図  
(鬼虎川・西ノ辻遺跡)



5



6

- 1 土師器大、小皿 (西ノ辻遺跡)
- 2 瓦器香炉 (西ノ辻遺跡)
- 3 備前焼摺鉢・瓦器摺鉢 (鬼虎川・西ノ辻遺跡)
- 5 刀子・熊手・火箸 (西ノ辻・鬼虎川遺跡)
- 6 宋銭各種 (神並・西ノ辻・鬼虎川遺跡)

## 11 水走遺跡の遺構と遺物

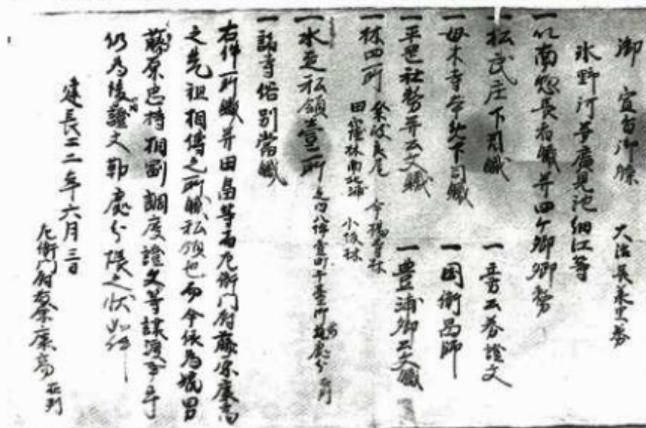
水走遺跡は水走・川中・古田船場・中新開に広がる、弥生時代から江戸時代に亘る複合遺跡である。この遺跡は昭和55（1980）年の鉄道・高速道路建設工事に先立つ試掘調査によって確認された。この地域は「水走」の地名が示すように、五条町に館を持ち、特に平安時代末期から室町時代にかけて活躍した水走氏によって開発され、所領されていた所と考えられていた。このことは周知の『水走文書』の中の寿永3年（1182）付けの「有福名水走開発田事」にも記されており、この地が代々相伝されていたこともその「譲渡状」などから窺える。

今回の発掘調査では11世紀後半から12世紀前半の堰・堤防・大溝や整地層などが検出され、その開発状況が判明した。そして13世紀

中葉ごろから濠を有する集落（柱穴群・墓・土坑などの遺構と多量の遺物を検出）が形成され、15世紀代まで及んでいた。しかし、16世紀代後半になると一部を除いてハス田と化し、遺跡状況からその盛衰ぶりを窺わせることができた。



水走家墓塔  
（市史跡）  
五条町所在、  
文化8年（1811）  
9月に水走飛騨  
守忠良が造立。  
高さ約3mの五  
輪塔。



藤原康高謄写  
（『水走文書』）  
梶岡忠持に対  
し、建長4年  
（1252）に相続させ  
た目録である。こ  
の中に「水走私領  
堂所」が見える。

『水走文書』は寿永3年（1182）から享和9年（1804）にわたる約40通の文書で、所領・軍役関係の解状・請文（平安時代末期～鎌倉時代初頭）、所領・所職の願状・目録・繪旨（鎌倉～室町時代）、任官・叙位に対する宣旨・口宣案と位記（江戸時代）、枚岡神社に対する寄進・禁制・社領（江戸時代）、水走氏の系譜の5種に大別できる。

## 縄文時代～奈良時代

縄文時代の遺物としては、後期の深鉢片・土鏃が海成層より出土しただけである。弥生時代では、遺跡西端部を中心に溝などの遺構と前期～後期の土器・石鏃などを少量検出した。古墳時代には土師器・須恵器が若干出土したのみである。

奈良時代になると開墾に伴う掘削跡が各所に見られ、土師器坏、ミニチュアのカマドセット、鏃、刀子、鏃などの鉄製品、刀子の柄などの木製品が出土した。

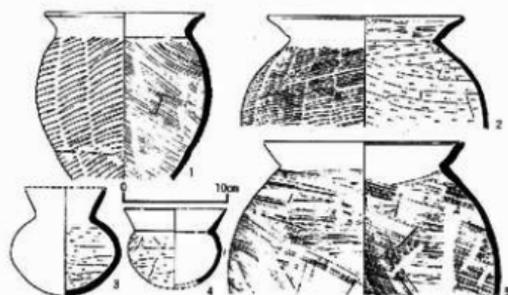


縄文土器一後期・中津式深鉢

石鏃 弥生時代



弥生土器 壺口縁



- A. 1 弥生時代後期 甕  
2 庄内式 甕  
3～5 布留式 壺 丸底甕 甕  
B. 1 須恵器  
2 製磁土器  
C. ミニチュアのカマドセット  
D. 1 鉄鏃 2 雁股式鉄鏃



### 11世紀後半～12世紀初頭

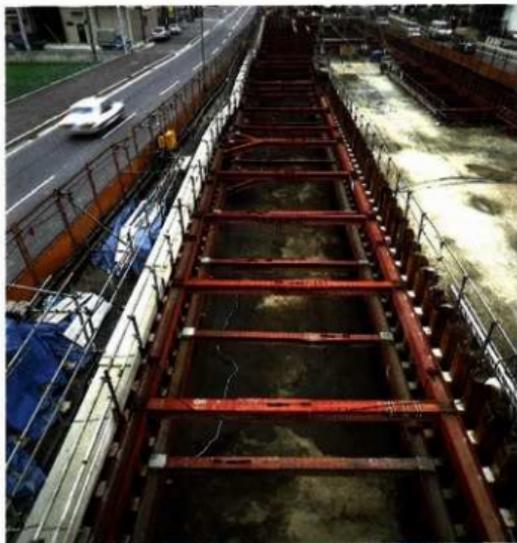
水走氏による開発事業が開始された時期である。本遺跡東側に南東方向から流れていた自然流路内に、堰・堤防を築いたのち盛土を行ない、開発地域（現在の水走から川中～旧吉田川東岸周辺）を確保した。



堤防遺構内出土土人形



堰(右上)から堤防へ



堤防状遺構

### 堤防の構築方法

南東から北西方向に流れていた自然流路に対し、その流路内にはほぼ直行する形で長さ1.5～1.1mの木または竹の杭を0.5～0.9m間隔に打ち込み、その杭列に竹を1～3段渡して堰を設け、流れを緩めることによって砂を堆積させた。その堆積した砂層東側斜面に葦束を貼り付け、一部には竹・木を渡して砂の堆積を確保し、その上に盛土を行なって堤防を構築したものと考えられる。この堤防によって流路を北方向に変え、旧吉田川との間の開発に着手した。



### 土坑墓

東西長1.265m、南北長0.635m、最深0.26mを測る不整の楕円土坑内に、身体をほぼ水平に横たえ、両脚の膝を折曲げた仰臥屈葬の成人男性が埋葬されていた。また、左腕上部から腰部にかけて、土師器小皿6点・瓦器碗1点が供献されていた。

墓は1基のみで、出土遺物から13世紀前半に営まれたもの。大湊の活用時期にあたり、調査地域周辺における濠を有する集落が形成される以前の墓である。



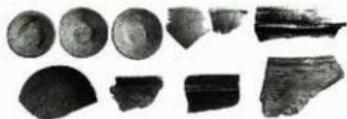
土坑墓



供献土器



しがらみ土坑



土坑内出土遺物

### しがらみ土坑

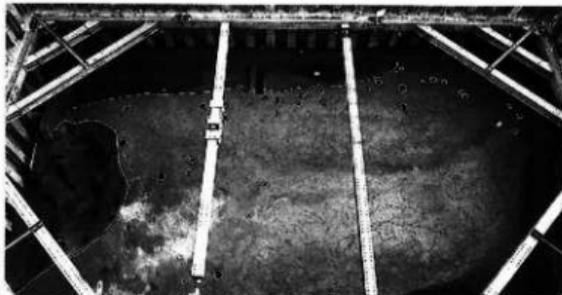
径約7m、深さ1mを測る不整の楕円土坑内にし字形のしがらみを設けてあった。しがらみは50~70cmの木杭を打ち込み、それに竹を3~4段に渡したものである。土坑内にはタニシ・シジミなどの貝遺体群があり、下層からはほぼ完形の土師器小皿3点が出土していることから、特殊な目的のため-祭祀などに使用され、上層で多くの瓦質土器片が出土し、後にはゴミ捨て場と化したと思われる。13世紀末~15世紀前半まで活用。

### 建物群の推移

今回の調査においては13世紀中葉から15世紀に亘る柱穴群を3面以上検出した。この地域の開発は11世紀後半から始まっているが、11・12世紀のものは検出されていない。このことは堰・堤防を構築して土地を確保し、排水用の大溝を穿って地盤を安定させてから、建物を建てていったためと考えられる。また、吉田川西岸でも13世紀中葉以降に集落を形成していたことも確認されている。



1.2小柄 3.4小刀  
(13世紀後半)



13世紀中葉の柱穴群  
・しがらみ土坑・溝



14世紀代の柱穴群・溝



柱石・柱穴検出状況



15世紀代の柱穴群と土坑・溝、  
方形土坑は16世紀代

### 河川出土の祭祀遺物

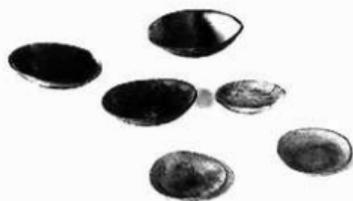
水定遺跡のほぼ中央に旧大和川の一支流である吉田川が北方向に縦断していた。その東岸斜面から鎌倉時代後半の祭祀に使用された祭具—瓦器埴、土師器皿、木製品、貝遺体(タニシなど)が出土した。木製品には矛・刀・劍・矢羽根などの武器形と斎巾、笠、櫛などがあった。



旧吉田川東岸と祭具類検出状況

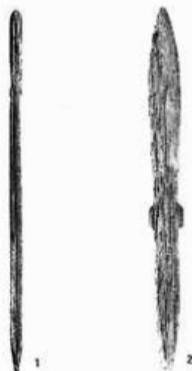


祭具出土状況実測図(1/60)



瓦器埴と土師器小皿

- 1 矛形 2 剣形 3 斎巾  
4 矢羽根形 5 刀形



1

2



3

4

5



### 16世紀から18世紀

16世紀になるとそれまでの居住区域で土坑・溝は検出されたが、柱穴は激減する。16世紀後半にはその周辺地域一帯はハス田と化する。ハス田は畦畔を伴い、ハスの実が多量に出土した。この時期の遺物としては漆器椀・皿・曲物・下駄などの木製品・鉄鍋・包丁などの金属製品、土師器皿、陶磁器などがあった。

16世紀前半から中葉の遺構

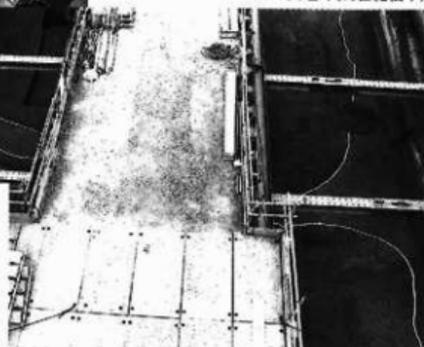
ハス田畦畔(16世紀後半)



漆器椀 (16世紀中頃)



鉄器  
(16世紀末)



付替前・後の大和川

17世紀になるとハス田は姿を消して、部分的に水田が営まれるようになるが、元禄17・宝永元年(1704)の大和川付け替え以降、旧吉田川の川床は川中新田として開発され、本遺跡内の多くは水田・畑地と化し、近・現代に至った。(若松・上野)



足跡  
(18世紀後半)

神並・西ノ辻・鬼虎川・水走遺跡  
調査報告書

2002. 2. 28

発行 財団法人 東大阪市文化財協会

東大阪市教育委員会

印刷 近畿印刷センター

